
二つのカケラ

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つのカケラ

【Nコード】

N7782R

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

水姫と水王。茱希と琉希。

裏では族潰し、表は双子。

新羅という族に出会い彼らの中で何かが変わる。

始まり

チチチッ・・・

「菜希っ！朝だぞっ起きろって？」

ん？誰え・・・私の睡眠の邪魔するのは・・・

「遅刻するって？置いてくぞ！」

・・・。。。。。。。

「遅刻？？今何時？」

すいませんっ！

私は神田菜希 高1ですっ！

兄弟が私も含めて2人でえってやばい！
ある事があって転校初日なんです？

「今8・・・00？HRって何時から？」

8・・・00ってやばい！

8・・・30までに学校着かなきゃなのにな？

「琉希い？もつと早く起こしてよお」

私を起こしにきたのは

神田琉希高1

私と琉希は双子♪
顔は似てないけど、とっても仲いいよ♪
同じ高校に行く。

「何いってんだよ？」

7・30から起こし続けてるし！

制服に着替え？」

30分も？ありがとう！琉希！
って感謝してる場合じゃないから？

琉希がクローゼットから引っぱりだした
新しい制服をキャッチして、
琉希が部屋から出てから着替える。

「ごめん！ママ、朝ご飯は？」

琉希ちよっと待っててねー？」

髪を軽くといてからリビングにダッシュした
玄関で琉希が叫んでるけど
朝ご飯食べないと私死ぬから？

「菜希いー？まじで遅刻！

転校早々ありえねえって？」

琉希の雄叫び(?)が聞こえたんで

パン急いで口に突っ込んで玄関にgo？

「行ってきまーす？」

「いってらっしゃーい、気をつけてね」

急いで玄関を出て、
琉希の自転車の後ろに飛び乗った。

「捕まってるよ！飛ばす？」

多分、もうHR始まってるけどね。

ま、気にしない！

だって私達が行くところは星稜高校っていう
不良高だからっ☆

「菜希、着いた？」

「……………HR始まってるよな？」

琉希に物凄い鋭く睨まれちゃいましたっ☆
えへっ☆怖くないよ？私のが強いしね！

「ごめん！昼食奢るからっ！

何組かな？一緒だといいねっ」

はぁ……………って溜め息つかれちゃったよ。

ゴメンナサイネ．．．？

「もういいから。ネクタイの裏見てみ」

ん？なんで裏？チラっ．．．．

S．．．．S組？

「Sだけど．．．これクラス？」

あ、そういや言ってたね。
説明係の禿げたオジサンが。

「まじ？俺もSだぜ！」

てことは！一緒？やったあ？

「一緒だね？んじゃ職員室行こう」

ながーいながーい廊下を歩き、
職員室に辿り着きました？

ガラッ．．．

「「遅れましたあ．．．．．」」

あれ？

琉希と顔を見合わせた。

「誰も．．．．．いないね？」

なんでだろ．．．．．？

「とりあえず、教室いってみよう」

ヤバイ事に気づいちゃいましたよ。ハイ。

HR始まってるじゃん。先生いるわけない。

またながーいながーい廊下を歩いていると

「おい、転校早々双子揃って遅刻か？」

ん？ココにいるわけない声が聞こえた。

うん、幻聴だよね。

「無視か？幻聴じゃねえぞ」

あ、違うんだ。現実逃避してもいい？

「「幸人．．．．．」」

後ろをふりかえると、悪魔が．．．．．？

「理事長がうぜえんだよ。」

お前等が攫われたって言ってんだよ」

私らをさらえる奴がいたら見てみたいね。
まず攫う勇気があるかどうかだね。

「さっさと教室いくぞ。

アイツ等放置してきた。」

え？教室？って事は、

「「幸人が教師？」」

ギロツて睨まれたけどさ、怖くないんだよね。

「俺が呼んだら入ってこい。」

シーン……………

幸人……………何をしたんだい？

あつ、幸人は全国No. 1の元副総長。
私と琉希は世界No. 1の族潰し♪

「転校生、入れ」

え？いきなりじゃないですか？

ガラ．．．

「自己紹介。」

何故に単語？

「．．．．．佐川琉希」

え、琉希そんだけ？まあいいか。

「佐川茱希です。よろしくね」にこつ

ん？どうしました男子諸君。

あ、私の笑顔がキモすぎたか．．．．

「席は、窓側の後ろとその隣」

．．．．異常に私らの席周辺空いてませんか？
新種の嫌がらせ？．．．．んなわけないか。

窓空 空 空？もともといない

側空 空 空？もともといない

茱 琉 空

こんな席。

変でしょ。確実におかしいでしょ。

「琉希・・・この席もの凄い嫌な予感がある
幸人も目あわさないし」

さっきからずっと目を反らすんだよねえ
怪しすぎるでしょ。

「H R 終わり?? 自習!」

そういいのこして逃げるように教室から
出ていった。

出会い

―――昼食の時間

「琉希、講堂行こっ！奢る約束でしょ」

授業は一応あったけど大学の過程まで終わってるし
つまらなさすぎて私達寝てたんだよね・

「おう！ここの飯美味いらしいぞ」

そうなんだあ！楽しみ♪

「琉希、決めた？私オムライス♪」

ただいま食券購入中です！
早く来れたみたいで少し人がいる位で
並ばずに買えた！

「んー．．．じゃあ、牛丼にする。
350円頂戴!」

お財布から350円出して渡した。

それぞれのご飯を受け取って、
隅の席に座って食べていると．．．

キヤーアアアッ!

「うわっ! うるさっ! 何?」

声の方を見ると、人だかりが．．．

「なんだよ、あれ? 迷惑」

隣に座っている琉希が顔を顰めた

人だかりの中心にいる男性と目あった

「る、琉希い．．．目あっちゃった．．．
最悪、こっち来るかも．．．」

ほーら、来ちゃったよ。最悪。

琉希とのランチタイム邪魔しないでほしいね

机の目の前に立ち止まらないでよ。．．

「あ？ねえ、この子達じゃない？

噂の美男美女って？」

びよこつと可愛い男の子が顔を出して
私達を指差した。

「人を指差さないでくれます？

それにその噂の人じゃないです」

琉希が冷たく言い放って、

オムライスも牛丼も食べ終っていたから
琉希の手をとって、講堂をあとにした。

「琉希ありがとっ！すっきりしたあ」

ウザかったしねー？

あんだけジロジロみられるとね！

「どこいく？屋上行ってみるか！」

屋上かぁ、学校といえそうだよね？

「うん、行こう？」

ギイイイ

屋上、扉の音やばくないですか？

「んゝっ！気持ち良いね、屋上！」

ごろんと2人で寝転がった。

あ．．．．．なんか眠いかも．．．．．

「ね、琉希．．．腕枕して！寝よう」

そのままだと痛いし．．．．．

「（え？腕枕って．．）いいよ、寝るか」

琉希の腕に頭を乗せて、眠りについた．．

屋上

「…………い…………お…………ろ…………起きろ?」

うわあっっ?

吃驚しすぎて眠気飛んだ?

つか誰?

「あ! 講堂の子達だ♪」

可愛い男の子?

ああ! 講堂でうざかった人達?

琉希起こさないと!

「琉希! 琉希、起きて?」

琉希は寝起きがいいからすぐ起きる。

「…………んあ? なんだよ、茉希
って! こいつら何?」

．．．．．寝起きは頭の回転が遅くなります。
冷静な琉希くんもテンパります。

「知らない！起こされたの？今何時？」

「今は5時間目が始まりますね」

「ご丁寧にどうもって、誰？
昼放課おわってんじゃん。」

「はあ、またあんた達かよ。栞行こう」

「琉希くん、敬語消えてマスヨ？
あんた達って．．．ま、どうでもいいけどね」

「あ．．．．．うん、行こっか」

「この人達明らかに族だ．．．．．
それに全員幹部以上の地位。」

「待てよ」

ピタッと動きの止まる私達。

「何？」

琉希くんやい、怖いよ？

なんか不機嫌じゃない？

私、琉希の後ろに隠されたし．．．

「俺は新羅の榊原蓮、お前は？」

新羅？どこだろう？

情報は琉希に任せてあるしなあ．．．

「．．．．．佐川琉希」

あ、そこ答えるんだ？

優しいですね、琉希くん。

「後ろの子はあ？名前なんていうの？

琉希くんの彼女？」

蓮さんと違って可愛い男の子だなあ・・・
彼女・・・？違う。ありえない。違法。
琉希、さっさと否定しようぜい？

「・・・・・・・・・・。」

そこは無視するんだ？
彼女のところは否定してほしかったなあ？

「女。お前の名前は？」

女って！呼び方どうよ？
名前知らないからってさあ？

「さが「言わなくていい」

えー・・・琉希、遮らないでよー
言わなくていいってなに？
女って呼ばれ続けろと？

「名前くらいいいじゃん。
私は佐川菜希。」

遮られず言えたよ？睨まれたけどね！

「いっちゃ駄目だろー・・・
つまらない？」

つまらない？ってなにΣ（・□・；）
彼女って反応楽しんだの？

「佐川？苗字同じじゃん！兄妹なん？」

関西弁さんいたんだ？
兄妹ってゆーか・・・

「「双子」」

ハモったあつ！

蓮さん、関西弁さん、可愛い男の子
紳士くんが笑った？（蓮しか本名ない？）

「俺は久城敦や！よろしゅうな？
栞希、琉希？」

関西弁さんⅡ敦

「僕は安西海斗、よろしくね！」

可愛い男の子Ⅱ海斗

「俺は新島真哉です。よろしく」

紳士くんⅡ真哉

でもなんで自己紹介されてるんだろ？
てゆーか新羅ってどういう族？

（ねえ！琉希、新羅ってどんな族？）

（はああ・・・やっぱ知らないんだ・・・
新羅は全国No.1の族だよ）

コソコソ話している
じーっと視線を感じた。

「じゃ、俺等はあるんで」

屋上の扉の取っ手に手を掛けると

ばあああんつつ？

「「危なつつ？」」

扉いきなり開くんだもん、咄嗟に避けたし！
開けたの私達じゃないよ？

「ごめん．．．遅れた．．．って？」

なんで女がいるんだよ？男も誰？」

また女って言われた！．．．．．
確かに女だけどさー、呼び方どうよ？

「よく避けたなあ琉希、茉希？
今の避けるって凄いやん？？」

敦やい！煩い．．．．．！

「チツ．．．危ねえな！

茉希、大丈夫か？立てる？」

扉開けた人謝ろうよ、私達に。

「うん、大丈夫だよ。余裕♪」

琉希に大丈夫って事をわからせる為に
ぴょんぴょん飛んでみた。

「よし、行くか」

今度は引き止められず出る事ができた・・・

興味

└蓮side┐

なんなんだ、アイツ等．．．？

あの勢いの扉を避けるのは難しい。

琉希って奴が茱希を庇ったと思ったが
違うみたいだな．．．．．

あの双子、面白い。

「真哉、あの双子について調べろ」

真哉のハッキングの腕はかなりイイ。
そうそう勝てる奴はいない。

「なんや、蓮も興味あるんか！

茱希可愛かったなあ？

琉希も格好ええやん」

相変わらず敦は煩い．．．．．

「蓮、あの双子なんですが……
ロックが頑丈です。ハッキングできません。
学校側からも守られている様です」

チツ……

何者だアイツ等？

「分かった。明日、直接聞く。」

ー茱希sideー

「失礼します」

私達は理事長室に来ましたっ！
幸人が会っつけていうもんだからさー

ガチャ……

サツ……

ドンツ……

説明しましよー、
ガチャが入った音。
サツが避けた音。（茱希&琉希）
ドンッがぶつかった音。

「痛ってえ．．．なんで避けるんだよ？
茱希！琉希！」

この意味わからない事言ってるのは、
まっちゃん（雅人）です。
どっかの族の7代目総長。
幸人は7代目副総長。

「雅人、謝罪の言葉はないのか？
いい度胸だな、避けるのは当たり前だろ」

．．．．．
んで、私達の代わりにまっちゃんとぶつかったのは
．．．．．
幸人。

（琉希！逃げるなら今のうちじゃない？）

（ああ、そうだな。足音、気配消せよ）

（（せーのっ！））

理事長室を出て、自転車置き場に行って足音、気配を戻した。

「危なかったねー？」

幸人の説教が始まるところだった。

まっちゃんに感謝しなきゃ」

ー帰宅後

「「ただいまー♪」」

「おかえりー、遅かったわね」

今日も夜行くからご飯しっかり
食べないとね♪

「「ママ(母さん)、ご飯？」」

巡り合い

夜ごはんもしっかり食べて準備OK♪
それぞれシャワーを浴びて、色を戻した

「琉希、着替えようか。時間だよ」

水姫の私は黒ワンピースにロングコート、
水王の琉希は黒Tシャツに黒ズボン

「準備できた？今日はバイクな！」

バイクか、学校もバイク通学でいいのに・・・
そしたらすぐ着くのかなあ・・・

「今日はどれくらい潰れるかな？」

「最近だいぶ減ったからねー」

琉希の後ろに乗りながら繁華街直行☆
バイク運転できるけどね、めんどい！

「ああ、新羅も薬とかやっているとこを潰してるらしいしな。」

蓮達もやってるんだあ……..
この辺は新羅が治めてるからねっ！
当たり前か……

「着いた。茱希、降りろ」

繁華街とうちやーく？
今日も暴れちゃいますか？

「きゃあっ！や、やめてくださいっ！」

ありゃー……早速？裏路地からだね。
まず確認しないと。

女性が男5人に襲われていた。

「ねえ、5人って卑怯じゃない？
情けないね、男の恥だね」

男の後ろに立ち、声をかけてあげた☆
5人もいなくても十分でしょ。

「あ”あ”？てめえ等誰だ！

俺等はなあ、奇岩に入ってたんだよ」

にやにや笑いながら近づいてくる男。

奇岩・・・・・・ああ、卑怯で汚いところか。
薬もやってるって言われてる。

コイツ等目の焦点あってない・・・薬。

「水王、よろしくね。私は女性を。」

こういう場合は通り名で呼ぶ。

「大丈夫？怖かったでしょう。」

さあ、立ち上がった。ここからでるの」

女性に手を差し伸べて、立たせる。
そろそろ水王の方は終わるかなあ。

「水姫、片付いた。
薬売られてるとこ吐いた」

準備万端だねえ♪薬も今日片付けようかな

「あ、あのっ！ありがとうございます！

私、鈴音っていいいます。貴方方は．．？」

貴方方はって．．．まあ、私達は．．．

「「水心」」

二人あわせてそう呼ばれる。
いつの間にかついていた名前。

「え．．．．．？水心ってあの．．．．？」

こんな子にまでわかるんだ？私達って。

「じゃあ、今度から気をつけてね。」

私達の顔はわからない。
フードを深くかぶっているから。

「鈴音??大丈夫か?」

複数の気配・・・5人?
後ろは振り返らない。

(水姫、新羅だ。今日は帰ろう)

蓮達か・・・ここは逃げなきゃね。

(うん。新羅が来れば大丈夫でしょうし)

逃げようとする・・・

「待て。お前等誰だ?」

めんどくさい奴ねえ、蓮。

誰でもいいじゃん。助けたんだから。

「お兄ちゃん、この人達助けてくれたの。
悪い人じゃないよ」

そうだよ、鈴音ちゃんもいつてるじゃん！

「…………お前等、水心？」

わかってんだったら呼び止めないでよ？
めんどくさい？

「そうだけど？新羅の総長の妹だとはな、
その子、狙われやすい。守りな」

水王サン、何故君は挑発的なんだい？
もっと穏便に出来ないのかな？

「わかってる。助けてくれて感謝する」

いやいや、感謝はいいんだけどさ帰ろうよ。
ママ私達が何やってるかしってるけどさ
あんまり遅いと怒られるって！

「行くぞ、水姫」

「ええ。鈴音ちゃん、さよなら」

そう言って家に帰った．．．．．

家ではママに怒られませんでしたっ☆

ちょこれーと

ガララッ

「茱希ちゃんっ 琉希くんっ おはよう！」

んにゃっ？

教室に入った瞬間抱きつかれた。

こんな可愛いのは1つしか知らない……

「海斗、おはよ！ ってか琉希？

大丈夫？」

思いつきり私の下敷きになっちゃったし

「大丈夫…… 海斗、くんいらねえ」

うん。それ私も思った。

「私もちゃんいないよ！ 茱希でいい」

なんか変な感じがするし。
これから構えとかないとね、海斗予防。

「おはよう、朝から仲ええなあ双子は」

「おはようございます。茱希、琉希」

「……………はよ」

敦、仲良いのは認める。

真哉も敬語やめてほしいんだけど、
なにより蓮？はよってなに？挨拶？

「「おはよー」」

席について、琉希と話していると…………

「なあなあ、知つとるか？

俺等昨日、水心に会ったんやで？」

……………それ、私達だよ。

鈴音ちゃん無事に帰れてよかったね…………
じゃないと蓮達に殺されるよ？

鈴音ちゃん襲った人達。

「茱希、琉希？こっち来い」

またまたブラックオーラ放った幸人☆
怖いよ。蓮達固まってるよ。殺気。

「「・・・ハイ（なんかしたっけ？）」」

敦がめっちゃ哀れみの目で見てるんだけど

廊下に出ると、

「何故新羅と仲良くしてるんだ？

昨日助けたのは蓮の妹だろう。」

何故か私だけ壁際に追い詰められました。
息かかるんですけど。

近いんですけど。距離1？くらいじゃない？

琉希から見ればキスされてるように
見えるよね。

「幸人？？？茱希を離せ？触んなあ！！」

琉希、叫ぶならまっちゃん呼ぼうよ。

バタバタッ

「何やってんだ？」

蓮達出て来ちゃったじゃん。

琉希をあんまり怒らせないでよね。

「幸人、やり過ぎじゃない？」

琉希がキレてもしらないよ。

新羅も面倒。」

にやりと幸人が笑っても私は冷静。

「茱希は冷静だな？」

琉希がキレたら茱希しか止められないしな
だけどここのままはつまらないしな」

チュッ

ガッシャーンッ

「・・・・・・・・・・ってえ」

このやろう・・・・・・・・！！

ゆ、幸人キスしやがった・・・・・・・・！！！！

思いつき蹴ってやったら吹っ飛んだ☆

「「「「・・・・・・・・・・。」「」「」」

「しゅ、茱希大丈夫？幸人お前バカか？」

蓮達いるんじゃない・・・・・・・・

蹴っちゃったよ・・・・・・・・

でもね？怒りが勝っちゃったんだよね。

「とりあえず幸人殺してもいいかな？」

うん。いいよね、琉希？」

まだ座り込んでる幸人の元へ歩いて行った
琉希が焦って電話してる。まっちゃんでしょ？

「ちよっ茱希、痛いんだけど？
蹴らなくてもいいだろ」

なめてるね。良い度胸してんじゃん。

「黙ってくれる？どんな死に方がいい？」

座っている幸人に視線をあわせてしゃがむ
にっこり笑って（黒笑い）言った。

「いやゝまだ死に「茱希いいいい？」」

チッもう来たか。

「なに？まっちゃん。

今からコイツ殺すんだから邪魔しないで」

睨むと少し怖じけずいていたけど、
琉希の方を振り返って

「おい、琉希い？お前しか止められない？

茱希を人殺しにしたくないいい？」

結局人に頼むんだ？意味なくない？

「う．．．．．わかった．．．．．」

ま、どーでもいいや、とりあえず、殺す♪

「さ、幸人。覚悟してね♪遺言はある？」

「ちよっ、茱希！待てって！」

（ここでやると新羅もいるし目立つ。

水心ってばれなくても怪しまれる！）」

小声でもっともな事を言われて、
たしかに．．．．．と納得しちゃったし。

「．．．．．今回だけだから。次は．．．．．ね？」

琉希が言ったからだよ？

琉希に感謝しなさい」

渋々やめてあげた。

本当は半殺しにでもしようと思ってたけどね

「菜希、おいで。我慢のご褒美あげる」

琉希に呼ばれてついていった。

ココにはお菓子の自販機がいくつかあって、
そこでチョコを買ってもらった。

「ありがとう！1つあげる？」

チョコ、琉希もすきでしょ？」

私達は好きな物も一緒。

それでよく小さい頃喧嘩してたけどね・・・

「ん。ありがとう。美味しいなあ」

機嫌も直ってルンルンで教室に戻った。

追及

教室に戻ると、新羅の皆様の視線攻撃！！
痛いっっ痛いよう！

「・・・・・・・・お前、誰？」

蓮サン直球だねえ・・・

「佐川茱希。」

あたりまえの事返してあげた。

「違う。・・・屋上来い」

琉希を見ると何やってんだみたいな
顔で見られましたよ。

「いいよ♪琉希もね？」

じゃないと私行かないから、
1人で行くわけないじゃんっ！

――屋上に着いて

「女を屋上に入れるのは嫌だ!!!!!!!!!!」

また女呼ばわりー？うざいんだけど。

「あのねえ、私は茉希。

女って名前じゃないの。

それにあんたの総長が連れて来たの！

私達は帰りたいんだけど？」

言いたいことを一気に言っていると疲れる……
でもスッキリしたあ！

「すみません、そいつは水谷陸。

女嫌いなんです。」

にっこり笑う真哉の顔嫌い。

こんな”作った”笑顔吐き気がする。

「……笑いたくないなら笑うな。

俺等大嫌い。そういう笑い方。」

ほらね？琉希も同じ事思ってた。

敬語もいやだけど恐らく、
初対面に対して癖になってるだろうから

「クスクス・・・ほんとに面白い子達ですね。
ここまではつきり言われたのは
初めてですよ。」

そんなコトどうでもいい。
私達は思った事を言っただけ。

「蓮、どうやら陸は私を入れたくない
みたいだから帰らしてもらおうよ。
琉希、行こう。もうすぐで昼食だよ」

気にいったんだよねえ、ここの味♪
美味しいしレパートリーもあるし。

「ああ、準備するか」

「んじゃね、新羅の皆さん」

しゅっしゅっ...

――講堂

「琉希っ、それ美味しそうちよつと頂戴」

私はあんまりお腹すいてなかったから
チーズケーキを食べてる♪

琉希はプリンを食べていて
とっても美味しそう？

「ん、いいよ。どうぞ」

ぱくっ

んー、おいしっっ！とろとろしてる？

キャー！ツツツ！！！！！！！

「ね、まただよ．．．．．琉希。煩いね．．．．．」

もの凄く嫌そうな顔してるよ、琉希。

うん、でもねほんと煩いんだよ。

鼓膜破れるんじゃない？つてくらい。

「うぜえ．．．．．だから女は嫌いだ。」

そうなんです。実は琉希も女嫌いなんです。

案外、陸と気があうかもね。

「でも、私も女だよ？私の事嫌い？」

無理に一緒にいるんだったら悪いな．．．

嫌いって言われればかなりショックだけど

しゅんとしてると、

「茱希は別だ。お前は隣にいればいい」

ぽんっと頭を撫でられて
とっても嬉しくなった。

「うん!! 琉希もずーっと一緒だよ!」

ぎゅっと琉希に抱きついた。

「なあ、そこイチャイチャせんといてや
禁断の恋でもするつもりなん?」

この喋り方は・・・!?

「敦、周りが煩いんだけど。耳が痛い。
琉希とのランチ邪魔しないで」

ほんと煩いんだよね。
女子の皆さんの視線も痛いし。

「茉希? 一緒に食べよーよ!」

海斗は可愛いけどさ、
いいかげん琉希が可哀想なんだよね。
嫌いな女に囲まれて。

「嫌。もう食べ終わったもん。
行こっ！琉希♪」

固まってる琉希を引っ張って講堂を出た

「琉希い？大丈夫？顔色悪いよ。
保健室行こう」

真っ青だよ？

「大丈夫。教室戻ろう」

全然大丈夫そうじゃない！！！！！！

「だーめ！！保健室いくよっ！」

無理矢理保健室まで連れて行った。

「失礼しまーす．．．」

「あれ？先生いないみたいだね。」

んー、じゃあベッドで寝てて？」

何故か保健医いないし。

ちよつと寝といたほうがいいよねっ！

「茉希は教室戻るのか？」

茉希も……一緒に寝て……？」

んにゆうっ？

琉希って昔から調子悪いと可愛い……！！

「うん、一緒に寝よっか♪」

ベッドに潜って、手を繋いだ。
人肌って安心するんだよ……！！

「「おやすみ琉希（茉希）」」

ゆっくり、休んでね……

蓮side

―蓮side―

まったく、糞女どもうぜえんだよ！
女どもがうるせえから屋上に行ったのに
敦がうるさかったら意味ねえじゃねえか！

・・・・・・保健室でサボるか。
どうせ保健医いねーだろうし。

ガラ・・・・・・

「寝みい・・・・・・、あ”？」

コイツ等、あの双子じゃねーか？
顔似てるなあ・・・・・・

高校生にもなって手繋いで一緒に寝るとか
どんだけ仲良いんだよ？

ガラッ・・・・・・！

チッ！誰だよ！！

「ああ、探したよ蓮。

勝手に消えないでくれる？

敦の相手を．．．ってこの子達．．．。」

真哉か。そりゃあ驚くよな。

彼氏彼女がいてもいい歳の奴らが
寄り添って寝てんだから。

「音立てんな、こいつ等が起きる。

敦がうっせーんだよ。」

バーンツッ！

「れーん！！！！どこいてんだよ！！

真哉まで！！！！」

うるせえっつーの！！！！！！

てめーのせいで此処にきたっつーのに．．

「うっせえ敦。

こいつ等が起きちまうだろうが。」

あーもう、マジうるせえ。

「んっ……、あれ？なんで蓮達が……」

ほれみろ菜希が起きちまった。
目を擦りながら起き上がる。

「あ……そっか、琉希が……」

なんか勝手に自己解決してるんだけどこいつ
意味わかんねえ。

琉希の方は起きねえのかよ。

「敦、静かにしてくれる？琉希起きちゃう。
ねえ、ちょっと琉希見ててくれる？
鞆取りに行きたいんだけど……」

困った顔をして言うもんだから、
ついで承してしまった。

「ありがとう！！すぐ戻るから。」

茉希はタタタツと走り去ってしまった。

「珍しい事もあるんやなあ？

蓮が人のお願ひ聞いたんやで？

奇跡や！！！」

黙れよ敦。

ーそれから5分位過ぎ

ガラ．．．．．

「ありがと。起きなかった？」

茉希が2つ鞆を持って戻ってきた。

「ああ。帰るのか？送る」

何故かこの双子が気になった。

こいつ等は人を惹きつけるモノをもってる。

「ううん。琉希、自転車だから。

琉希っ、起きてー！帰ろ？」

「んー、．．． 茉希い？帰る？」

ぼーっとしてる間に琉希が起きたらしい。
鞆を茉希から受け取ってベットから出てきた

「茉希はあげない♪」

すれ違い様に囁かれた。

つーかどういう意味だよ．．．．．
あげないって貰うつもりねーし。

「蓮、真哉、敦バイバイ♪」

蓮 side、end

衝撃

今のは夕食中ですっ？

琉希の顔色はだいぶ良くなってるけど
今日は族潰し止めとこ．．．．．

「ねえ茉莉、琉希。私、海外行くのよ。

貴方達は残るでしょ？

だから、2人で暮らしてね☆」

．．．．．What？

ママ、とうとう頭イカレタ？？

「「はあっ！！！！！！？」」

あ、パパが今海外で仕事に行ってるんだ。
一応日本でトップの会社の社長。
優しくて自慢のパパなんだよ♪

親バカだけだね．．．．．

「あんた達仲良いからいいじゃない♪

私だって隆さんと暮らしたいのよー！！！」

隆さんとはパパの事です。

ママとパパは今もラブラブ。

「．．．．．いつから？」

「明日から。」

学校に近いマンション購入済よ♪」

私って仕事早い♪とか言ってるママは
ほっといて．．．．．

「「はあ．．．．．わかった」」

溜息もでるよ．．．．．

うん、でも納得かも。

部屋の家具が綺麗さっぱり消えてたし。

「うふふ♪そう言ってくれと思うってたわ
マンションは隆さんの所の物だから
家賃は必要ないわよ。」

パパの物って事は高級マンションか．．．．
最上階にしよう、景色もいいだろうし。

「「ごちそうさま」」

2階の部屋に行って、ベットにダイブした。

「んゝ．．．疲れたあ」

こんこん

カチャ．．．．

「茉莉？寝てんの？」

琉希かあ．．．．．狸寝入りしてやる。

「・・・・・・・・・・。」

ベットに座った琉希。
気付いてないのかな？

「・・・・・・・・・・ 族潰し、行こっかな。」

ええ？

「駄目！！琉希、顔色悪かったんだから！！！」

ニヤリと笑った琉希を見逃さなかった
そこで気付いた。

「やっぱり起きてたな？ 茱希」

っ！！！！？はめられた！！！！

「むうー・・・、琉希の意地悪！！」

プイツと顔を背けた。

「ごめんって。ほら、こっち向けよ」

両頬を手で包まれて琉希の方を向かされた

「……よく似てるって言われるけどさあ、私こんなに顔整ってないんだけど?」

いや、ブラコンじゃないよ?

多分私がいつも一緒にいるから高校では騒がれないんだと思うよ。

まあ、もともと新羅がいたからってのもあるだろうけどね。

「……んな見られても困るんだけど?」

少し頬を赤らめる琉希が可愛い。

よく恋人に間違えられたよ、うん。

「あはは♪綺麗だなあって思ってたね。」

ママ自由過ぎだよな?

いきなり2人で暮らせて……。

琉希だからいいけどねえ」

にこにこ笑って思った事をそのまま言った。

うちは基本自由だから楽なんだよね。

「そうだよな、いきなり明日からって．．．

せめて1ヶ月くらい前から言っというてほしいよな」

あー．．．．．なんだか眠い．．．．．
このまま寝ちゃおうかな．．．．

「ん．．．琉希い．．．眠い．．．．．寝る。

琉希ここで寝てね？おやすみ．．．」

そのまま意識を手放したーーーーー。

「おやすみ、茱希。

俺の一番大切な人．．．」

その眩きは茱希には届かない．．．．．

衝撃

今はの夕食中ですっ？

琉希の顔色はだいぶ良くなってるけど
今日は族潰し止めとこ．．．．．

「ねえ茉希、琉希。私、海外行くのよ。

貴方達は残るでしょ？

だから、2人で暮らしてね☆」

．．．．．What？

ママ、とうとう頭イカレタ？？

「「はあっ！！！！！！？」」

あ、パパが今海外で仕事に行ってるんだ。

一応世界でトップの会社の社長。

ママはパパの秘書。

優しくて自慢のパパなんだよ♪

親バカだけだね．．．．．

「あんた達仲良いからいいじゃない♪

私だって隆さんと暮らしたいのよ!!!」

隆さんとはパパの事です。

ママとパパは今もラブラブ。

「．．．．．いつから？」

「明日から。

学校に近いマンション購入済よ♪」

私って仕事早い♪とか言ってるママは
ほっというて．．．．

「「はあ．．．．．わかった」」

溜息もでるよ．．．．．

うん、でも納得かも。

部屋の家具が綺麗さっぱり消えてたし。

「うふふ♪そう言ってくれると思ってたわ
マンションは隆さんの所の物だから
家賃は必要ないわよ。」

パパの物って事は高級マンションか．．．．
最上階にしよう、景色もいいだろうし。

「「ごちそうさま」」

2階の部屋に行って、ベットにダイブした。

「んゝ．．．疲れたあ」

こんこん

カチャ．．．．

「茉希？寝てんの？」

琉希かぁ．．．．．狸寝入りしてやる。

「・・・・・・・・・・。」

ベツトに座った琉希。
気付いてないのかな？

「・・・・・・・・・・。族潰し、行こっかな。」

ええ？

「駄目！！琉希、顔色悪かったんだから！！！」

ニヤリと笑った琉希を見逃さなかった
そこで気付いた。

「やっぱり起きてたな？ 茱希」

っ！！！！？はめられた！！！！

「むう！・・・、琉希の意地悪！！」

プイツと顔を背けた。

「ごめんって。ほら、こっち向けよ」

両頬を手で包まれて琉希の方を向かされた
「……………よく似てるって言われるけどさあ、
私こんな顔整ってないんだけど?」

いや、ブラコンじゃないよ?

多分私がいつも一緒にいるから高校では
騒がれないんだと思うよ。

まあ、もともと新羅がいたからってのも
あるだろうけどね。

「……………んな見られても困るんだけど?」

少し頬を赤らめる琉希が可愛い。

よく恋人に間違えられたよ、うん。

「あはは♪綺麗だなあって思ってね。

ママ自由過ぎだよね?

いきなり2人で暮らせて……………。

琉希だからいいけどねえ」

にこここ笑って思った事をそのまま言った。
うちは基本自由だから楽なんだよね。

「そうだな、いきなり明日からって・・・」

せめて1ヶ月くらい前から言っというてほしいよな」

あー・・・．．．．．
なんだか眠い・・・．．．
このまま寝ちゃおうかな・・・

「ん・・・．．．．．
琉希い・・・．．．．．、寝る。

琉希ここで寝てね？おやすみ・・・」

そのまま意識を手放した――――。

「おやすみ、茉希。

俺の一番大切な人・・・」

その呟きは茉希には届かない・・・．．．．．

茉希&琉希の容姿紹介!!!

はぁーい！突然ですけど、

茉希と琉希のプロフィール&容姿紹介します！！

でわでわどうぞお！！！！

神田^{カンダ}茉希^{シュキ} 高1

族潰し^{スイシン} 水心^{スイヒ}の水姫。

双子の琉希と仲がとっても良い。

水色の瞳と髪で鬘とカラコンをして

高校に行っている。（琉希も同様）

右耳に水色の小さいピアスをしている。

顔は琉希と似ていて、整っている。

神田^{カンダ}琉希^{ルキ} 高1

族潰し^{スイシン} 水心^{スイヒ}の水王。

双子の茉希と仲がとっても良い。

水色の瞳と髪で鬘とカラコンをして

高校に行っている。（茉希も同様）

左耳に水色の小さいピアスをしている。

顔は茱希と似ていて、整っている。

こんな感じですねー。

でわ次は水色ピアスの小話です。

ー水色ピアスー

今日は私と琉希の誕生日!!!

実は一昨日プレゼントを買っておいたんだ♪
今からソレを渡しに行くトコ。

喜んでくれるかなあ〜??

コンコンッ

「はーい、茱希ー?」

ガチャ…………

「琉希っ! 誕生日おめでとう! ……!!」

「わっ…………! 茱希っ?」

ドアを開けた瞬間抱きついてみた。
想像どおり、吃驚してる♪

プレゼント♪と言って琉希にソレを渡した
ソレを琉希が開けると、驚いた顔をしたけど
すぐに笑顔になった。

「茉希、ありがと。」

俺等ってやっぱ双子だな!!!!!!」

意味深な発言だったけど、
次の琉希の行動ですぐ分かった。

「俺も茉希にプレゼント!!!!!!」

にこにこ笑顔で渡された物を開けると、

「え？琉希、私は何あげるか知ってたの？」

何故か琉希にあげた物と全く同じ物。
ちゃんと隠してたから知ってるわけない……

「知らない。だから双子だって!!!
ほら、付けよ!!!!!!」

知らなかったのに同じ物だったんだ...
さすが双子♪

お互いにあげた物。それは今も二人が
身につけている、水色ピアス。
これは二人にとってのタカラモノ。

一生変わらないタカラモノ。

ランチ!?

2人暮らしを始めて一ヶ月…………

「琉希ー、先に講堂行つといて。

トイレ行ってくるー」

昨日アイスを食べすぎたからかなあ???

お腹の調子が良くない……………。

「わかった。いつもの頼んどくな?

早く来いよー。」

うー……………お腹痛い……………。

ガラッ

ん? 誰かはいってきた??

個室から出ようと手をかけると、
トイレのトビラが開いた。

「ねー、あの茱希って奴うざくなーい?？」

え．．．．．? 私デスカ??
うーん? なんかし たつけ?? 私。

「そーそー、琉希くんと居るのは
見逃してやってんのにさー」

こいつ等に関係ないでしょ。

琉希と居て見逃して貰ってると思ってないし

「新羅様とも関わってるとか調子乗ってる。
シメテやらないとねえ．．．．．?」

いやいや、蓮達がよってくるんじゃない。
群がってる君達がよく知ってるでしょー?

「はあ．．．．．」

面倒な事に巻き込まれたなあ。
こういう時つくづく男に生まれたかったよ．．．

女達が去った後、トイレを出た。

講堂に向かうといつもの席に女が群がっていた

「あちゃー・・・、遅かったかあ」

琉希早く助けないとっ！
小走りで席に向かった。

「ねえ、邪魔。騒ぐなら他行ってくれる？」

煩い講堂に私の声が響いた。

「はぁ？何言ってるの？ウザい」

皆、ケバイねー。ぱんだサンだよ（笑）

「聞こえなかった？？邪魔って言ってるの。
どいてくれる？」

にこっり笑って挑発気味に言ってやった。

あははー。顔真っ赤。面白っ！

「てめえ！！！！調子乗ってんじゃないやねえっ！！」

パシッ！

「そんなパンチ届くと思ってんの？？」

「そんなにレディースやってける？」

軽々と片手でパンチを受け止めた私を、
その場にいる全員が驚いている。

「っ・・・・・・・・・・・・・・・・！！？クソっ！やれ！！！！」

ふーん・・・・・・・・こいつが総長かあ・・・・・・・・
ほんと、弱いんだねー？

「・・・・・・・・・・・・・・・・何やってる」

あーあ、面白そうだったのになー・・・・・・・・
邪魔しないでよね、蓮。

「蓮様．．．！？っ引くわよ！」

新羅の皆様ご登場ー

「あの数相手にするきやったん？

アイツ等一応レディースやで。

茱希やられてまうやん」

敦一、負けるわけないじゃん。

あんな奴らに負ける方が難しいよ。

「そーだね。琉希、大丈夫？？」

うん。完全にフリーズしてるね。

さて、どうしようかな。

．．．．．仕方ないね。

「うわっっ．．．！？」

やったー、だーい成功ー☆

あ、耳嚙んだだけだよ。

「茱希！！！！なにすんだよ！！！」

えー、起きない琉希が悪いんじゃない？？
起こしてあげたんだから感謝してよね！！

「しねーよ！！！別の方法もあるだろう！？」

あれ？声に出てたのかな？？

「お取り込み中悪いですけど、

茱希と琉希は何処かの族ですか？」

“族”ではないよねー。潰すけど（笑）

「「入ってない」」

すると、皆驚いた顔をした。

「でも、さっきのレディースNO.1ですよ？

そこらの女性より強いはずなんですけどね・・・」

あー．．．余計な事したかも。

No. 1であれくらいってレディース弱っ！

「ふーん．．．ま、武道とかやってたし。

師範にもなれるよ」

「茱希って凄いなえく？ 琉希もできる？？」

海斗はふわふわしてるね。髪も性格も。

「．．．．．一応」

さっきまでの勢いはどこいったのかな？？
ものすごく微量の殺気が出てるよ。

琉希くんやい。

「琉希、不機嫌になんないで。ね？」

琉希の手をぎゅっと握った。
すると、握り返してくる。

「・・・・・・・・ん。わかった」

琉希ってキャラ掴みにくいなあ。

「なんや！ 茱希だと随分素直やなあ？」

あー、余計な事いわないでよ。・・・

「チツ・・・・・・・・黙れ、敦」

ほーら！！ また機嫌悪くなっちゃうじゃん！！

「もう！！ バカ敦！！ 行こう、琉希」

蓮達を横切ろうとすると

ガシツ・・・

「・・・・・・・・何？ 蓮」

腕を掴まれた。

「お前等倉庫、来い。」

言葉少なあつつ？

つか、なに言ってるの、この人。

「「嫌」」

そうだよね、嫌だよね。

悪い予感しかないもん。

「強制。敦、海斗、真哉。」

蓮が言うと、動きだした。

今ので伝わったんだ……？ 凄いな。

うん？ なんで私捕まってるの？？

「真哉、離して。」

すぐ側に海斗と敦に追い詰められた琉希。

いや、真哉の気配には気付いてたよ？
まさか捕まえる為なんて思わなかったし。

「行くぞ」

新羅

「「総長、ちわっす!!!!!!」」

そうです。お察しの通りココは新羅の倉庫。
強制連行でしたから。

殴るといろいろ厄介だし??

それにしても元気な下っ端君達だ.....

私と琉希をガン見して、こいつ等誰?みたいな。

「入れ」

あの.....この部屋って幹部室だよな?
私達入っていいの??

「蓮、おかえ.....り.....って!
なんでソイツ等.....!!!!!!」

あ.....、そーいや居なかったね。陸。

「「お邪魔してます．．．．？」」

なぜ疑問形って?? ココ倉庫だし。

「蓮がね、茱希と琉希氣にいったんだよ。

倉庫に連れてくって言いだしてね．．．」

真哉、分かりやすい説明をありがとう。
氣にいられても困るんだけどね？

「でもっ！ ココは部外者は入れないって！！
ソイツ等は部外者だろ?!」

そのとおりです。

「ほら！ そう言ってんじゃん。
早く帰らしてよ!!」

今日は琉希が夕飯作るんだからっ！
琉希の手料理めっちゃ美味しいんだよ!?!
それだけを楽しみに一日過ごしたのに!!

「茱希……それは褒めすぎ。
いや、嬉しいけどね？ 恥ずかしい……」

そう言って琉希が私の首に顔を埋めた。
んにゃ！？ 声に出てたの！？
うーん、直さないとなあこの癖。

「え？ 琉希が作ってるん？？
母親はどうしたん？」

やっぱ気になっちゃうよねー。
高校生ですから？？ 私達。

「ん？ 今頃イチャついてるんじゃない？
アメリカで。」

みんなの顔が強張った。
ありや？？ なんか勘違いしちゃった？？

「ごめんごめん！！ 浮気じゃないからね？？
パパとイチャついてるんだよ。
あの2人が浮気とかありえない（笑）」

クスクス笑いながら言うと、
みんなの表情が柔らかくなった。

「あれえ・・・？じゃあ2人で暮らしてるの？」

相変わらず可愛いなー、海斗は。

「うん！！（ああ）」

結構楽しいんだよ。2人ってのもいいね。

「「「え・・・！？（はあ！？）」」」

ん？？そんなに驚く事言ったかな？？
聞かれたから答えただけなんだけど・・・

「じ、じゃあ2人きりなん！？」

琉希かて健全な男の子やで！？可哀想や！！」

イッテルイミガワカリマセン。

「菜希、意味分かんなくていいから。

こいつは無視してればいい。」

敦を睨む琉希。でも無視は駄目でしょ???

「琉希!! 酷いやん!! 無視せんで!!!!」

パーティー

その後、ずーっと倉庫で遊んでいた。
何気に下っ端君達とも仲良くなっちゃった☆

「おい、双子。新羅に入らないか？」

はい??蓮サン、とつぜん何を??
いやいや、無理っしょ。嫌だし。

「「ヤダ」」

即答ですよ、ハイ。だっていやだもん。

「即答せんといてや……。」

ちよっとは考えてくれてもええやん!!!!」

うーん……泣き真似はうざいよ、敦。
第一私ら水心だからサ??

「なんで・・・」「プルルル」

ありゃ、携帯？？

「ごめん、私の。ピッ！

もしもし？？ 茱希だけど」

相手確認するの忘れてたわ・・・

「茱希様ですか！？」

どこにいらっしゃるんです！！

「琉希様もごいっしょですか？！」

うおう・・・。。耳痛いです！。

「刹那ね？ 琉希もいるよ。どうしたの？？」

刹那は私と琉希の執事。同じ歳。

敬語やめてっていつてゐるんだけどね！・・・

「無事なんですね？ 実はご主人様と奥様が
一時帰国なさってるんです。

茉希様と琉希様にお会いしたいと。」

“ご自宅に上がらせてもらいましたけど、不在でしたので。”
と言われた。

パパとママが帰ってきてるの！？
パパにも会えるんだ！！

「茉希？？誰から？」

私が嬉しそうな顔をしているのを
不思議そうに眺めている琉希。

「刹那から！！」

パパとママが一時帰国してるんだって！！」

そう告げると琉希の顔が明るくなった。

「父さんいるの！？会いたい！！」

私の家族はみーんな仲良しだからね！！
私達に反抗期なんて無かったんだよ？？

「茱希様、お迎えに参りましょう。
どこにいらっしゃるんです?..?」

あ、忘れてた。ココ倉庫じゃん。
まあいつか!!

「ちょっとまってね。刹那」

蓮達の方を向くと、戸惑ってる皆さん。
今なら逃げれそう☆

「用ができた。帰るから!!
ばいばーい」

ダッシュで倉庫をでた。

「刹那、新羅の倉庫にいるの。
できるだけ早く来て」

「かしこまりました」

追いかけられたら困るから。

3分程待つと、黒塗りのベンツが来た。

私達の前で止まると、

助手席から綺麗な男性がでてきた。

「茉希様、琉希様。お迎えにあがりました。
では参りましょう。」

私達は車に乗り込んだ。

倉庫の入り口から見ている人達がいるとも
知らずーーーーー。

「茉希、琉希。お前等は一体何者なんだ」

蓮は呟いた。

それは、ココにいる全員が思った事だろう。

パーティー2

「「パッパママ!!（父さん、母さん）」」

本邸に帰って、リビングへ行くと、
2人がソファーにいた。

そこに駆け寄ると笑顔で迎えてくれた。

「会いたかったわ。菜希、琉希。」

「元気だったか？相変わらず仲良いな」

あたりまえっ!!喧嘩なんてしないし？

「ねえ、どれくらい日本に居れるの?？」

急な帰国だからすぐ帰っちゃうのかな・・・？

「1週間後には戻らないといけないから、

その間にどこかへ出かけるか!」

みんなで遊びに行けるの!?

日本にいてもあんまり無いのに!!

「ほんと!? やったー!!」

「ふつ、まだまだ子供ね・・・??

そうだ、あの事言わないと」

いいもーん! 子供でも嬉しいんだから!!

・・・?? あの時??

「明後日に神田主催のパーティーがある。

それに2人にも出席してほしいんだが・・・

学校は休んでもいい。」

・・・へ? パーティー? なんの??

「「こーよ」」

今まで出席しなかったのは言われなかったからだし……。美味しいもの食べれるかも!?

「そうか!! ありがとう。」

じゃあ出かける時友達とかつれてきたい人はいるか?」

んー……。友達かぁ……。いないネ。
新羅くらいだね、関わりあるのって。

……。そうだ!!!

「「刹那!! 刹那と行きたい!!」」

やーっぱり!! 琉希も一緒に事思ってる!

「え……。? 私はいいですよ……。
皆様で行って下さい。」

刹那も高校生なのに遊んでないし!!!
なんか私服もみてみたいし??

「いーの！！刹那も行くよ？

私、刹那と行きたい！ね？琉希！！」

「おう！刹那も行く！！」

刹那の右腕に私、左腕に琉希が抱きついた。
オロオロと私達を交互に見て、
最後にパパを見た。

「刹那、行ってやってくれないか？

茉希達も言ってるしな」

刹那に微笑みながらパパが言った。

「では、お言葉に甘えて。

ご一緒させて頂いてもいいですか？

茉希様、琉希様。」

「「やった！！刹那っ、一緒に遊ぼうね（な）」

ぎゅうっとな刹那に正面から抱きつくと
「わ．．．っ」とバランスを崩した。

「そーだ！！刹那は高校行かないの？？」

気になってたんだよね、高校生なのに。

一緒に行きたいけど．．．．．

刹那もつと頭いいしねー．．．．

「菜希、私も言ってるんだがね。

なかなか折れてくれなくてな．．．．」

じゅーなな

「行こうよっ刹那なら友達もできるよ?？」

私達の高校だとちよつと不安だけど?？
ま、刹那は強いから大丈夫だろうけど。

「いえ、そこま「行つて?？」」

にっこり笑って（?黒笑）言う
と冷や汗をかいてるよ?刹那?

「.....はい。ですが、条件があります。

私も菜希様達と同じ高校。

ご主人様いいでしょうか？」

え!?!不良校だよ!?!刹那が!?!
一緒に嬉しいけどね!?!

「かまわんが.....あそこでもいいのか?」

ですよー。パパもおもうよね？
不良じゃないよ。

「はい。学校でもお守りできるので。」

あ、そうですか。守るのが目的？？
普通に楽しんでほしいんだけどなー。．．．

「ありがとう。明日から行くといい。
理事長には言っておく」

まっちゃん適當だからね。
だれでもwelcomeですよー。

「やったあ！！刹那と一緒に！！」

「あら、もう23時よ。そろそろ寝なさい。
刹那と学校行くんでしょう？」

そういえば眠いー．．．．．本邸で寝よ．．．

「「おやすみー」」

そういい、2階の自室に入った。

――――

――――

――――

「刹那、すまん。無理を言って。

許してやってくれ。

あの子達が相当懐いてるみたいでな」

「いえ、私も嬉しいので。」

「そうね。学校でも頼んだわ」

「はい。必ず。」

じゅーはち

「しゅっきー！！起きろー！！！！！！」

「んぎゃー！！何！？重いっ」

耳が壊れるって！！！！！！

眠気も吹っ飛びますよ皆さん！！

「おはよー菜希」

「おはよ、琉希って！！！！！！」

刹那いるなら起こしてよー」

刹那はもっと丁寧に起こしてくれますし！？
目覚め最高ですよ！！

「いえ、起こしたんですけどね……………」

どうやら話を聞くと、

刹那は何度も起こしたけど、

私が起きなかったから先に琉希を起こすと
琉希が私を起こして、今に至ると．．．．

私が悪いんじゃない!!!

あれ?? 刹那、制服．．．．

「そっか!!! 刹那も学校行くんだ!!!」

「はい。でも時間が．．．．」

えっ? じ・か・ん??

「わぁー!!!!!! ごめんっ! 朝ご飯はいいや!!!
着替えるから出て待っててえ!!!」

~~~~~

――――

――

てなわけで一応間に合って理事長にいます。

「君が舞島刹那くんだね。

茉希と琉希と同じクラスがいいよね。  
席も近くしといたから」

まっちゃんナイスっ!!

初めて感謝した!!!

「茉希達はそろそろ行かないと遅刻。

幸人に怒られるよー。」

うわっ!! やばい!!!!!!

「琉希、行こっ!! 刹那、また後でね」

教室に入ったら幸人に怒られて、席につきましたー。

んで、敦にバカにされた。

殺そうかなって思ったよ、本気で。

「転人生がいるぞー。ついでに男な。

イケメンだぞ、入れ。」

「前島刹那です。よろしくお願いします」

そんなに微笑むと倒れる女の子いるよ？

あ、すでに4人犠牲者が……………

「席は茉希の後ろな」

やった！！まっちゃん&幸人最高。

蓮達がめっちゃ擬視してるよ。

それでも笑顔を崩さない刹那は凄いよ。

「んじゃーな。自習だってさ」

他の先生達怖くて近づけないからって  
幸人に伝言するとかさ．．．．  
どこまで怖いのか？

「茱希様、宜しくお願いいたします。

授業はないんですか？

先生が見当たらないんですけど．．．」

ちよっ！！！！刹那っ！

「えっ？茱希様って「刹那あ！！案内するよ！」

海斗の言葉を遮り刹那と琉希を引っ張って  
教室を出た。中庭の影に連れて行った。

「いい？刹那、“様”はダメ。敬語も。

ここでは佐川で通ってるの。

学校では執事の役職は忘れて。」

「ですが．．．．、茱希様は茱希様ですし．．．  
慣れてしまってるので．．．」



うーん．．．困ったなあ．．．．．  
バレてもいいけど．．．態度が変わるのはな．．．

「それに新羅には私の顔がばれています。

倉庫に行ったとき後ろにいましたので」

ええ！？やっぱり追いかけてきてたの！？

ヤバイじゃん！！！！

でも．．．．いつかはバレるんだしいつか。

新羅にだけ教えてあげよう。

「「いっその事バラす？？」」

やっぱそう思いますよねえ琉希さん。

「いいんですか？」

水心はばれちゃマズイけど  
神田の事ならいいよねー。

「「いいよ」

じゃ、屋上にいれば来るよね。

「屋上で待とうか」



「あ、刹那ミルクティーおかわり」

「俺もー」

「かしこまりました」

復活するまで無視しよう。

それにしても刹那のミルクティーおいしー．．．  
どこからともなくお菓子もあるし。

「ええ！？キモって言われた挙句

存在さえ無視するん！？」

ミルクティーってなんやねん！！！！！！！！

ティータイムか！？そうなんやな！？

刹那も何気無視やんな！？ヒドイッ！！

あんた等をそんな子に育てた覚えありまへん！！！」

おお．．．．．マシンガントーク．．．

敦はメンドクサイ。無視をきめこもう。

「茱希様、琉希様ケーキもございますが  
召し上がりますか？」

ケーキ!!!? 敦を刹那も無視してるね。  
正しい選択だよ。

「わーい♪でも余っちゃうね。・・・  
そうだ!! 蓮達も食べるー?」

いまだ放心状態の彼等にも味あわせてあげよう。  
ずーっと屋上の扉にいても暇だろうし。

「・・・あ、えっと・・・ 茱希と琉希と刹那さん?  
なにやってるんですか。・・・?」

正気が1番戻ったのは真哉あ!!  
でも質問の答えになってない。

「「ティータイム(です)」」

家だとママがお菓子を作るんだよね・・・  
シェフ顔負けだよ、あの美味しさ。

「まあまあ、座りなよ？」

話があるから搜してたんでしょ？？

お茶でもしながら話そう」

ぽんぽんと椅子を叩いた。

「う．．．．．ん？」

海斗が微妙な返事をしながらトコトコ来た。  
席に座るとジーと私達をみている。

「なんか飲みたいものあるー？」

「ケーキもあるよ」

「え、あ、じゃあアイスココアを．．．．．」

ココアかー、うん。あってるね。  
海斗のイメージに？

「刹那、アイスココアお願い。

ケーキもね♪」

「少々お待ち下さい」

屋上の影に刹那が行き、数分で戻って来た。

「お待たせいたしました。」

海斗の前にアイスココアを置いた。

「ええ！？ど、どこで作ってきたの！？

材料とか道具は！？」

気になっちゃうよね。ココ屋上だもんね、

「刹那マジック。凄いでしょ？

聞いても教えてくれないよ。」

「マジックではありませんよ、茱希様」

刹那がクスクス笑ってるー！

何、馬鹿にされたの！？いや、刹那しない！！

「あのー．．． 茉希？ 琉希？

教室でも気になったんやけどな？

“様” ってなんやねん。」

あ、立ち直ってる。早くい♪

「その質問に答えてあげるからさ？

とりあえず座ってね♪ 蓮と陸と真哉も」

さっきからね、怖いんですよ。

蓮の視線。貫通しちゃうよ、変死体だよ！！

「刹那も座るんだよ。ココな？」

そう言っただけ琉希は自分の隣を叩いた。

えー．．．．．、じゃ、私の隣はあ？？

．．．．． いらっしやいましたね、ハイ。

なんか蓮が既に座ってましたよ。

「聞きたい事は？」



一気に視線が集まった。

ここで口を開いたのは冷静な真哉で……

「あなた達双子と刹那さんの関係はなんですか？  
どうやら親しいようですが……」

クス……、カンケイねえ？

「「執事………かなあ？」」

全員が目を見開いた。

「今では一般人にも執事がおるん！？」

ありえへんや「敦、黙って下さい」

真哉がブラックオーラ放出中♪

「どういう事だ」

わぁ、蓮がココに来て初めて喋ったー！  
うん、でもさ声低くなってるよ。

「だからあ」

「佐川は」

「「偽名」」

パンツと琉希とハイタッチしてみたり？

「じゃあ、本名はなんですか？」

「「神田」」

蓮以外みーんな顔引き攣ってるよー？  
神田だもん。しかたないじゃん。

「“あの”神田・・・？世界の神田やん！！！！！！」

「「そーそー、その神田」」

やっぱ暴走族でも知ってるんだね、  
凄いよパパ。素晴らしいね。

「何故隠したんです？」

えー、決まってんじゃない。

「メンドイから」

金目当てでよってくる奴らをたくさん見て来た。  
ただ普通に友達が欲しかったただけなのに。  
でもね、今は

「刹那が親友だから！」

刹那はとても驚いた顔をしたけど、  
凄く綺麗な笑顔で、

「ありがとうございます」

にじゅー

「でも、一般家庭と同じ様に育ったし？  
たいして変わらないけどな」

「執事がいる時点で変わっとるわ!!」

おおぅ・・・ 琉希につっこんでる人、  
初めて見たかも。

「「そーだね」」（↑棒読み）

「うわあああん!! 腹黒双子がイジメるう!!!!  
刹那ああ!!!! 慰めてえや!!!!」

うわー、ウザっ。

敦のキャラってウザいなー・・・

「茉希様、琉希様。

明日、9時に迎えが来るそうなので、  
用意して下さいね」

・・・・・・・・刹那、フルシカトだね。  
にしても腹黒とは失礼な!!

明日どこに行くんだろ？楽しみ♪

「はい」

あ、明日学校休むって事まっちゃんに  
伝えとこ。どうにかしてくれるでしょ。

カチカチとメールを打っていると、  
琉希が覗き込んで来た。

「なにやってんの？メール？？誰？」

彼氏か!! っつつつこみたくなりますよね  
でも、私達の間では当たり前なんだよね。

「んー？まっちゃん。伝えようと思って」

返ってきたメールは、

《いーよ☆お土産よろしく》

・・・・・・・・・・・・・・・・

「「女子高生か!!おっさんが!!!!!!」」

ハイ、ハモリ。相手は分かるよね?  
そのとおり。琉希だよ。

「え?どーしたの、2人して」

おっと、蓮達がいるの忘れてた。  
わざわざメールにしたんだから。

「いやっなんでもないよ、ね?琉希」

「あ、ああ」

王龍の元総長のまっちゃんとまで  
仲がいいって知れたらめんどくさそうだし。

あ、王龍の初代がパパだから仲いいんだ♪  
元副総長の幸人はバレちゃってるし？

「まっちゃんって誰だ？」

へ！？な、ななんで蓮がそのあだ名を！？  
メール覗いてたな！？なんてやつ！！

「ん〜と、知り合い？かな」

「女か？」

え、そこどうでもよくないですか？  
まあ別にこれくらいいいけど・・・

「男・・・だけど？どうかした？？」

てか今日はよく喋るね、蓮。  
みんなも吃驚してるよ。

「ふーん・・・寝る」

え！？寝るってなに！？自分から聞いといて  
どうでもいいってか！？

えええええ！！！！蓮、私の膝で寝るの！？  
膝枕ですか！？琉希しかした事ないけど！！

「わー！！！！蓮がつ！！俺の茱希の膝でええ！！！！  
どけっどくんや蓮！！起きろおお」

敦のものになった覚えはナイんだけど。  
気持ちよさそうに寝てるしこのままでも  
いいよね。起こすのも可哀想。

一応総長だし疲れてんじゃないの？  
煩い敦もいるしね。

「ハイハイ。敦は黙ってて。煩いの。  
蓮が起きちゃうでしょ？  
私も眠いから寝る……………」

茱希は琉希の肩にもたれて眠った。

2人が眠った後の会話……………



「珍しいですね．．．蓮が人前で寝るなんて。

そうそう熟睡なんてしないんですよ、

話し声とか小さな音でもすぐ目を覚まして．．．

それだけ茉希は安心できる存在なのかもしれないですね．．．．．」

そういうながら蓮を見る真哉はまるで  
母親の様な優しい目だった。

「蓮は茉希が好きなんだろうーな！

蓮自身も気づいてないだろうけど．．．．

茉希も俺から離れてっちゃうのかな」

そう言う琉希は少し寂しそうだけど、  
茉希の幸せを誰よりも願っている。

「蓮が認めても俺は女なんて認めない。

女なんてみんな一緒だ．．．．．」

陸だって本当は分かっている。  
茉希がなるべく陸に近付かない様になっている事を

女 の 存 在 を 認 め た く な い だ け . . .

「 茉 希 様 は 優 し い 方 で す よ . . . . . 」

刹 那 に と っ て 茉 希 は 妹 の 様 な 存 在 。

茉 希 は 確 か に 強 い が 、 守 り た く な る 。

にじゅーいちい

「茉希、迎え来たー！早くー」

「はーい！！もう行くー！」

今日は行くのは水族館。

刹那が行った事ないんだってー！！

下に降りるとこの前のベンツがあった。  
その横に私服姿の刹那が立っていた。

「「刹那、おはよっ！！」」

タタッとそこまで2人で駆け寄った。  
気付いた刹那は優しく微笑んで、

「おはようございます茉希様、琉希様」

どうぞと車のドアを開けた。

中にはパパとママがすでに乗っていた。

「おはよう、茱希。琉希。」

「「おはよパパ、ママ（父さん母さん）」

そのまま車で1時間程揺れていた。

みんなでずっと喋っていたから暇にならなかった  
むしろとても楽しかった。

「着きました。行ってらっしゃいませ」

運転手の人に言われて車から降りた。  
周りから色々な声が聞こえてくる。

「あれってもしかして神田……………」

「隣のって子供！？双子ね」

パパは神田として世間に知れている。

子供がいる事も知られているし、

今更私と琉希の顔が知れてもどうって事ない。  
どうせ今度のパーティーで知られるし？

「わ……………混んでるね？」

平日にも関わらず、人が沢山いる。  
何故か今は学校のはずの高校生も．．．．．  
カラフルな方達だけだね（笑）

一般の人達びくびくしてるよ？

「わー．．．綺麗．．．ねー、琉．．希．．？」

あれ？みんなどこ行っただの？

最悪．．．迷子？？こんな人混みじゃ見つからない．．  
とりあえず歩き回ろう。

ドンッ

「いったあ．．．すいません．．．」

ぶつかった相手を見上げると、  
これまたカラフルな方達だケド．．．  
顔も整ってる新羅の皆様でしたー．．．

「菜希だぁー！！琉希は一緒じゃないの？」

コテンと首を傾げる海斗・・・可愛いです。  
でも抱きつかれるのは痛いです。

「あ、はぐれちゃって・・・携帯使えないし？」

この人混みじゃあ圏外にもなるよ・・・  
琉希、早く見つけてくれないかな・・・

「一緒に来い」

はい？誰がおっしゃいました、今？  
口調的に1人しかいないけどね？  
内容がアリエナイっつかね？

「蓮、嫌だよ！！女なんて！！」

ほーらね？陸が嫌がんのわかってるし。  
笑いをこらえようと俯いた。

「菜希ごめんね。陸があんな事言って」

・・・どうやら勘違いされた様子です。

泣きそうなのを耐えてると思われたっぽい。

「い・・・や、真哉だいじょ・・・ぶだよ」

笑いそうで声も震える。

「声震えてるやん！嘘はあかで」

勘違いが募ってくんですけどー！？  
でもある意味大丈夫じゃないかもね。

笑いそうで。

「あははは！！もーバカでしょ？

笑いこらえるのに必死だったのに。

ほんと大丈夫だから。

嫌われるのは慣れてるよ。」

嫌われ慣れた？違う。

嫌われる位なら自分から突き放した。

「本当にそう思ってるか？」

私を見る皆の顔は酷く辛そうで、  
私が笑えていない事に気付いた。

「思ってるよ」

嘘をつくのは簡単な事。

作り笑いができないのなら表情は無。

「なら何故泣いている？」

え・・・？疑問に思った瞬間に腕を引かれて  
蓮に抱きしめられた。

蓮のやわらかい甘い香りがして  
とても落ち着いた。

「菜希は嘘が下手だ。」

泣きたい時は泣けばいい」

菜希ーそう呼ばれてトクンと高鳴った。

「・・・いつも喋らないくせに、



こーゆー時だけ喋るなんてズルい……」

そういうながらもぼろぼろと涙を零した。

「茉莉ー!!!!」

私を呼ぶ声にハッとした。琉希だ……  
蓮から離れようとする、  
さらに強く抱きしめられた。

「蓮!? それ…… 茉莉だよな？」

返してくんない？」

「嫌だ」

はい!? 離してよ!! つか返せよ!!

「ちよっ!! 蓮、なにいつて…… んっ!？」

なんでキスされてんの!? 蓮に!!

「ふ…… んう、ちよっ…… れ…… んっ」

クラクラしてきた．．．．  
足に力はいらないし．．．も、無理．．．  
ガクンと崩れ落ちる所で腰を支えられた。

「なに．．．すんの．．．．．ハア、いきなり」

頭がぼーっとする．．．．  
平然と立ってる蓮は余裕そうで。

「お前は「茱希様!!」」

蓮がなにか言うのを遮って、刹那が来た。  
パパとママはいなかった。

「刹那、パパとママは??」

「あちらのレストランで、  
お待ちして頂きました。」

指差す方向を見ると．．．．いた。  
めっちゃ挙動不審。キョロキョロしてる。

「蓮ありがと。また学校でね」

今度はスルリと抜ける事ができた。  
固まってる琉希をおこして、  
レストランへむかった。

この後は両親に飛びつかれて泣かれた。  
でもちゃんと水族館を全部みてから  
家に帰りましたっ！

にじゅうに

今日はパパ達が日本にいる最終日。  
今はパーティー会場にいます・・・

「ふぁー・・・眠い・・・」

ほんとと眠いんだけど・・・  
何故か眠い。

「ほら、そろそろ人が来るわ。」

「琉希から離れるなよ」

誰がくるんだろ・・・  
琉希も私もめんどくたー一覧表見てないし。

ザワザワ・・・

あーあ、来た来た。

「本日はお招きありがとうございます」

「この方々は神田様のお子様ですか？」

とか。通る人全てに声を掛けられる。  
はつきり言って喋りかけないでほしい。  
対応がめんどくさい。

「茱希、あっち行こう」

どうやら琉希も同感らしい。  
誘いに乗って料理がある方へ行った。

キヤアアアア!!!!!!

はい！？マジでなんなの！？  
学校で聞き飽きてるっつの！！  
ウザくて悲鳴なんざ無視していると、

「神田様？お会いできて光栄です。」

聞いた事のある声。

振り返って見ると．．．．

「「なんで．．．．．!!!!!!」」

新羅の皆様でしたー！ー！ー！。

「知ってるもんやと思ってたで？

苗字いったんやから。

神田の子供が知らんっちゅーのが  
おかしいねん。」

だってさあー、興味なかったし。  
新羅自体にも。神田の傘下も。

「茱希可愛いー？琉希もかっこいいーねっ！！」

んぎゃあっ！！！！！

海斗くん．．．．い、痛いです．．

バツ．．．．

・・・・・・ん??

「蓮サンですよ？離してくんない？」

説明すると、蓮が海斗から引き剥がして私を抱きしめたと。

引き剥がした意味なくないですか？

「嫌」

え!?!なにこれ!?!前もあつたよねこの会話!!  
デジャヴ!?!デジャヴなの!?!

「蓮が甘えん坊になった」。

なんか可愛いー?」

なんて言っていると、視線を感じた。

真哉、敦、海斗に群がってるお嬢様方達の諦めと嫉妬の混じった視線。

神田で良かったって今めっちゃ思ってるよ一般人だったら殺されそう。

「そーいや陸がないよ？」

蓮の視線の先を見てみると、  
一生懸命隠れてる子猫もとい陸がいた。

「うわー、なんかすげー可哀想」

琉希が呟くと、

「俺は可哀想じゃない!!」

って陸が叫んだ。

叫ぶとさ、見つかったちゃうよ？

あ、ほら見つかった。

あちゃー・・・ 囲まれちゃったよ。

「さっ触んな!! ぎゃあ!!!!」

泣きそうじゃん。

大っきな瞳に涙いっぱいためちゃって・・・

「仕方ないなあー」



蓮はいつのまにか離れていたから  
陸の方へ歩いていった。

お嬢様達は私が来ると道を開けて行く  
陸の前まで辿りつくつと、

「ちょっと我慢してね」

と手を繋いだ。

そのまま歩いて自室へ連れていった。  
椅子に座らせて救急箱を持ってきた。

「あーあ、顔に怪我してるよ。

動かないでね」

治療が終わって離れようとするつと、

「離れないで．．．．．」

陸はそう言つて私を抱きしめた。

え．．．．．！？まっ待つてよ！：！：！：！

陸って女嫌いじゃあ……

「陸……？私、女だよ？」

「いーの。菜希はいいの」

えっ、心開いてくれたかんじ！？  
てか可愛いすぎじゃない？この子！！  
ほんとに子猫に見えてきた……！！

「ふふっ、そっか。ありがとう。

みんなのところに戻る？」

私の膝で頭をコロコロしてる陸に言うと

「女………また来る」

そんな心配はいらない……！！

「大丈夫。私といれば寄ってこないよ。  
手、繋いでいいから。ね？」

手を差し出すときぎゅっと握ってきた。

「よし。行こっか」

会場に戻ると案の定誰も寄ってこない。  
にこっと陸に笑いかけると、  
安心したのか、表情が柔らかくなった。

「おーい！！菜希、心配、し．．．．．た．．．で？」

なぜ最後疑問系なの？敦くんやい。

「わー！！陸が手繋いでるうー！！！！！！」

海斗、可愛いけどうるさいよ。

真哉はびっくりしてるし、

蓮は不機嫌だし．．．．．琉希は固まってる？

「カイ、嫌い」

陸って海斗の事カイって呼ぶんだー！！  
初めて知った．．．．．！！

「どうやって手懷けたんですかね。」

黒い・・・!! 真っ黒だ!!!!

真哉じゃないし手懷けたとかやめてほしい

「べつにー、なんもしてませんけど?」

## 二十三

しばらく皆と喋ったり食べたりしていた。

「皆様、我が社の社長神田隆様の

ご子息、ご令嬢を紹介いたします。」

司会が喋りはじめた。

呼ばれたからステージへと2人で向かった。  
ステージに上がり一礼すると、  
再び司会が喋りはじめた。

「神田琉希様と神田茱希様です。

お二方、一言お願いいたします。」

マイクを渡された。

今の私達は神田の子息と神田の令嬢。  
通常の私達は存在しない。

「初めまして。神田琉希と申します。

今回はご出席頂きありがとうございます」

「初めまして。神田菜希と申します。

今もこうして神田が繁栄しているのは  
皆様のおかげです。

これからよろしくお願い致します」

再び礼をすると拍手が起こった。

「ありがとうございました。

ではもうしばらくパーティーを  
お楽しみくださいませ」

司会の言葉で私達もステージから降りた。  
すると煉達がやってきた。

「ねえ、どっちが神田の社長になるの？」

誰もが気になってると思われる質問を  
海斗がした。

双子でもどちらかが社長になる。  
だから私達は――

「「2人」」

こういう決断をくださった。

両方なっちゃえば？ってパパが言った。

「「「「は（え）？」」「」」」」

驚いてるねー。でも真実だから。

「どっちかが秘書にでもなるのかと．．．」

「そや！！秘書はだれがやるねん」

ああ、秘書ね。秘書は決まってるし。  
どっちがなっても秘書はかわらない。

「「刹那」」

刹那だよ？決定事項だから☆↑勝手に  
いやー、刹那しか私達の世話は無理。

「私ですか！？」

あれ？いつのまに來たの？

「「そう」」

「ほかにも優秀な人ならたくさん．．．」

この男はなにふざけた事言ってるのかな？

「刹那じゃないとやらない」↑琉希

「刹那やらないなら家出する」↑菜希

と軽く、軽くだよ？脅しをかけた。

「刹那、愛されてるやん。」

「刹那さん、家出されますよ？」

刹那は私と琉希を見て笑い、

「手の焼ける方達ですね。」

と言った。



でも笑ってるところを見ると、  
わかってくれたっぽい。

「刹那は納得したみたいだな

栞希、琉希」

「刹那なら私達も安心ね」

大人達と話していたパパ達が来た。  
私と琉希以外が頭を下げていた。  
あの煉達までさげてる。

「そう堅くなるな。2人の友達だろう？」

パパはにこにこ笑っていて、  
仕事のときの面影は全くない。

「「「「はい」「」「」」」



## にじゅーよん

パーティーから1ヶ月たって、  
学校では新たな行事・・・文化祭の季節だった。

「今日は文化祭の出し物決めるぞ。  
意見のある奴は言え」

文化祭ねえ・・・サボっちゃダメなんだよね・・・  
自分がお店だすの面倒。  
まわるだけがいいんだけど・・・

コスプレやら色んな意見がでた中で、  
決定したのはアニマル喫茶。  
動物の格好するんだって!!

「あ、菜希と琉希は猫。決定事項だから。  
理事長たつての希望っつー事で」

は!?!意味わかんないし!!!

「あのジジィ……」

「ん？なんか言いました？？」

やばっ！！真哉に聞こえちゃったみたい。

「茱希と琉希は猫ねえ……」

「似合うねっ！！」

海斗さん。そんな可愛く言われても……私達が猫なら海斗はうさぎだね。茶色の。

「茱希は猫耳メイドで俺だけに体でご奉仕してく」「死ね」

ほんとしねばいいのに。敦なんて。ウザいカラ。

「ひ、酷いやんっ！！声でてんねん！！死ねって！！ウザいって！！」

あらら、でてたんだ？  
ま、どーでもいいけど。

「ねえ、皆はなんの動物??」

あ、海斗はうさぎ希望。いや、決定」

「え? 俺うさぎ決定なの??」

「俺様はなあく虎や!!」

「俺はなんでしょう・・・」

「じゃあ、豹にしよ。腹黒な所がぴったり」

最後の方はボソッと。ほんっとボソッと  
言ったのに!! 真哉様には聞こえたようで。

「後ね、陸は・・・犬? 忠犬な感じ??」

だって今も私の横で私の髪いじってるし。  
心開けばwelcomeみたいなね??

「蓮は・・・ってゆーか蓮って接客できるの?  
ものすごく出来なさそう」

お客さんを睨みつけてそう。客払い??

「てめえ・・・それくらい出来る」

できるらしいです。  
でもやりたくないっぽい。

「蓮は動物なら狼っぽいな」

狼・・・目つきとかあってんじゃない??  
（笑）  
琉希、ナイスアイデア!!

「蓮が耳とかしっぽつけるん!?  
最高や!!爆笑もんや!!」

あー・・・敦も馬鹿だねえー・・・  
蓮の目の前でそんなに大笑いして・・・

あ、ほら殴られた。

「蓮っ、殴らんでもええやないか!!  
手加減せなあかで!!」

「・・・菜希」

え？敦をガン無視して私呼ぶの？？

「んー？なに？？」

蓮の隣に座るように言われて、  
座ると膝に寝転がってきた。

「・・・寝るのはいいけどね、ここ教室。  
せめて屋上行こうよ」

そういうと眉間に皺を寄せながらも  
起き上がった。

私の腕を掴んでスタスタ歩きだした。

「ワガママな総長さんだねー。

茉希も大変だね」

海斗キミのとこの総長さんでしょ？  
そう思うならどうにかしてよ。

にじゅうい

「座れ」

なぜに命令形なの？俺様主義なの？  
軽くため息をついてソファーに座った。  
ココは蓮達の倉庫。学校はサボリ（笑）

「そんな寝てると夜寝れないよー」

膝に寝転がって寝た蓮に話しかけた。  
勿論答えはかえってこないけど。  
暇になって蓮の髪を触っていた。

「なんでこんなサラサラしてんの？」

染めてないからってこんなに綺麗にならないよ。

「「菜希もサラサラだよ」」



隣で私の髪をいじってる陸。  
後ろでは琉希が触ってる。

そんな髪触られると気になるんですけど・・・

敦と海斗はゲームに夢中で  
真哉はパソコンをカタカタ・・・

「暇だ・・・ハロー☆」

バンッ

「「「「「!?!?!?!」」」」」

「扉壊れたらどーすんだよ」

「修理費は自分出してよ?」

3人知らない人が入ってきた。

「るせえ・・・誰だ」

あーもう、蓮起きちゃったよ？  
寝起きの機嫌悪いんだよ……

「おお！！愛しの兄ちゃんが会いにきたよ！！」

わーおここまで蓮の嫌そうな顔みれないよ？  
だってほら、真哉まで嫌そうだもん。

「ん！？隣の美少女は誰だ？？」

え？美少女なんていない？？  
あえて言うなら海斗？

「触るな」

この人の手が伸びてきた所で  
上に持ち上げられた。

「……………琉希？」

「んん！？この美少年は誰だ！？  
いつのまにこんな増えて…………バシッ」

眼鏡の真哉っぽい人が殴って  
その人を引きずった。

「ごめんね、この馬鹿が。」

えっと・・・君たちは・・・？」

「まあ取り敢えず座ってください」

真哉が言うと3人はソファに座った。

あのー・・・私座るとこないんですけど・・・  
さっきまで座っていたソファは

3人掛けで蓮、琉希、陸が座ってる。

「お前はこっち」蓮

「は？ 茱希はここ！！」琉希

「ダメ！！こっち！！！」陸

こんな鬭いが続き真哉に怒られ、  
どさくさに紛れて蓮に引っ張られて  
蓮の膝に座ってます。

「蓮と陸が・・・女の取り合いした・・・」

3人は呆氣に取られている。

「いつもの事ですよ。」

で、先代は何の用ですか？」

・・・・・先代？

「暇だったから。来て正解だったなあー？

面白いもの見れたし♪」

え？先代って先代だよね？  
蓮達の前の代って事だよね？

「おい、こいつら誰？」

え、こいつら呼ばわり？  
イラッとかちやうんだよねー。

「初めまして、神田菜希です。」

琉希をつつくと嫌々立ち上がった。

「ツチ・・・ 神田琉希」

てゆうかこの3人の中でよくよく見れば  
知ってる人いるし。

「あなた・・・ 榊原紫月さんでしょ？」

入ってきた瞬間からテンション高かった人。  
そして・・・ 榊原コーポレーションの現社長。

「そうだよ俺は紫月。でもそれより  
なんで君たちがこんな所にいるのかな？  
神田財閥次期社長さん？」

この紫月さんもパーティー会場にいた。  
だから見た事があったんだ。

「クラス同じだから。」

「ええ！？ 仲間とか言う所ちゃうん！？」

敦はなにいつてるの？ トモダチならまだしも  
ナカマ？ 違うでしょ。

「「違うし」」

私が仲間と認めたのは琉希だけなんだよ。  
家族も特別だけどね？

「違うのか？」

「違うよ。でも貴方達は嫌いじゃない」

これは本当。

「じゃあ何故？」

「仲間は一人いればいいの」

その一人を信じて、支える。  
その一人が私にとって琉希。  
その一人は琉希にとって私。

「でも友達は一人じゃなくてもいいの」

この人達が私達の友達かは分からないけれど。

「矛盾してる。」

矛盾？分かってるよ。

友達でも他人は他人。

同じなもの、友も。他人も。

結局は孤独。独りが嫌なんだー！。

にじゅうろきゅ

「変わった子達だね」

私が話おわると口を開いた眼鏡さん。  
変わった子？よく言われるよ。

「思った事を言っただけですよ」

だって本当に信頼しているのが仲間でしょ？  
上辺だけの関係なら友にもならない。  
心から信頼している人はたくさんいない。

「考え方が高校生とは思えないよ。」

あ、俺の名前は結城葵、よろしくね」

.....でも高校生なんで。

「.....加納萩」



この自己紹介の間も永遠と喋り続ける  
紫月さん。……煩い。

「紫月ウルサイ。

葵さん達くらい静かにいろよ。寝れない」

あれ、いつの間に琉希の膝に？

「なんで葵はさん付けなのに

俺は呼び捨てなんだよ！！

っーか茱希もそこで和むなよ！！」

え、私？仕方ないじゃん。

琉希って落ち着くもん。

「紫月さんなんて気持ちわるい。」

同感。でも一応年上だし。

「ひっでえ！！お互いそこで和むな！！！！

周りはなんで何も言わないんだよっ！

双子だからって茱希をおお！！」

ほんと煩い。

「いつもの事ですし」真哉

「琉希が怖い」敦

「言っても無駄だもん」海斗

「嫌だけど茱希もいいみたいだし」陸

「……………」蓮

うん、あのさ蓮寝てばっかじゃない？

「ようするに無駄……………なのか？

琉希っお前表と態度が全然違うじゃんか！！

俺はもっと好青年をイメージして……………」

好青年？アリエナイ。

無理無理。絶対ない。

「イメージだろ。」

あんなの素だったらキモい」

そりゃね。にこにこしててイイコちゃん  
なんてそうそう居ないでしょ？

「あ、いたよ。そんな感じの人！

真哉とか葵さん？」

自分でいっという思ったけど．．．．．  
駄目じゃん。腹黒だよ、真哉。  
葵さんは分かんないけど。

「俺は！？俺！！」

「紫月さんは駄目ですよ。

馬鹿っぽそうだし」

「ええ！？ 茱希酷い！！笑顔で毒舌！？」

んー毒舌って言われる時もあるかなあ．．．  
でも馬鹿っぽいのはほんとだし。

「紫月は馬鹿だよ」

あはは、葵さんのが直接的っ！

「紫月さん、ドンマイ！！」

え、敦も馬鹿でしょ？

それに慰められる紫月さんって．．．

「茱希、時間」

はい？蓮起きたんだ？

「なんの？」

時間ってなんの？ってなるでしょ。

「家、時間」

蓮くんは文が作れないの？

会話が単語なんですけど．．．．

一応わかったけどね？

「そうだね、帰ろうかな」

もう8時過ぎだし。ご飯食べたいし!!

「送る」

「琉希いるから帰れるよ」

「送る」

「いや、だから「送る」

「・・・わかった」

今の会話も送るしか言っていないよ・・・  
てゆーかなんでそんなに送りたいがるんだろ？

「またね。茱希ちゃん、琉希くん」

「紫月さん葵さん萩さん、また今度」

「ん・・・」

「バイバイ!!」

萩さん自己紹介のときしか話してないよね？  
まあベラベラ喋る人じゃないだろうけど・・・

「茉希、琉希行くぞ」

にじゅ↓なな

――「え．．．．．？」

朝、いつも通り登校。

いつも通り幸人のHR。

ただ、違ったのは転校生が、来た。

「滝川 都>タキガワミヤコです!!  
よろしくね」

それも、最悪の――――

「み、やこ．．．．．？」

「あー!! 茱希に琉希っ! 久しぶりい」

その、可愛らしい顔で笑う悪魔――

「近付くな．．．」

明らかにトーンの低い琉希の声。

「．．．．．なんで」

何故、彼女がここにいるのか、

何故、笑っているのか、

元・親友で私を裏切った都がいるの？

「ちょっと、幸人、ごめん．．．」

フラリと教室を出て行くと視界の隅に

映ったのは蓮達の不思議そうな顔と

琉希も席を立て着いてくる姿．．．．．

幸人も事情を知ってるだけに、

何も言わなかった。

「ねえ琉希、都何考えてるの？」

中庭に行くと授業中だから誰もいない。



「分かんね．．．」

座ってボートと空を見た。

ザーツ

「「キャハハハ」」

「「．．．は？」」

上から水が降ってきて体は水浸し。  
．．．．．私だけ。  
窓からやられたのは確実。

「っ寒．．．」

夏といえど今日は悪天候で冷たい風が吹いてる。  
これじゃあ風邪ひく．．．

「チツ都か．．．．これ着てろ」

言う通り、都の差し金だろう。

琉希のブレザーで体を包んでギュツとにぎった。

「保健室でタオル借りてくるから、  
ここで待ってろよ？」

ポンッと頭を撫でて保健室へ行ってしまった。

「あ、茉希くってどないしたん!？」

数分そこで丸まっていると  
敦らしき声が聞こえた。  
顔を上げると蓮達もいる。……都も。

「ちょっと水遊びをね……」

「この寒い日に!？」

だってかっこ悪いじゃん?  
水かけられたーなんて。

「茉希っ大丈夫??」

心配そうな声をだしながら  
近づいてきたのは都。

相変わらず、演技がお上手な事で・・・

「触らないでくれる？」

伸びてきた都の手を払った。

「なんでっ？私は心配して・・・」

「あんたに心配されたくない」

そう言う和海斗が間に入ってきた。

「茱希酷いよ。都ちゃんは心配してるのに」

そう、都を守るようにして。

「私、都が嫌いな」

「茱希、言い過ぎだ」

蓮達まで都の味方をした。  
陸はどちらにも付かないけれど。

「近寄んな」

琉希が戻ってきたらしい。  
てゆうかどうしてこういう時に、  
刹那がないの？

「俺も、都が嫌いだ」

私達の親友．．．．芽依を殺したんだから．．．．

「本人に向かって嫌いなんて最低やで」

なにも、知らないくせに。

「あははっやっぱり、同じね」

「．．．．．そうだな」

笑う場面じゃないのに笑う私と、  
ソノ言葉に乗る琉希。

「何が？」

都の涙に騙されるなんて全国NO.1も  
落ちたものね。

「さあ？自分で考えれば？」

蓮達なら信じてみようと思ったのに。  
やっぱり同じ。他と同じ。

「んじゃ、都と仲良くねー♪」

「馬鹿みてえ……」

私と琉希は踵を返して中庭を後にした。

――

――

――  
ガラッ

「・・・・・・・・・・。」

次の日教室に入ると目に入ったのは  
私の席に座って蓮達と仲良く話す都の姿。

「ねえ、そこ邪魔」

そこまで早足で行き冷たい声をだした。

「えゝだってこの席蓮くん達と

話しやすいんだもん。

茱希、席変わってよ」

「いいよ。てか荷物とりに来ただけ。

学校には来るけどこの教室には来ないし。

勿論、琉希もね」

都のいる空間にいたくない。

教室のかわりに理事長室にいる事にした。

屋上も中庭も蓮達に見つかるから。

「なんで！？ 茱希？？ 琉希？？」

海斗に腕を掴まれた。

「言ったでしょ？ 私達、都が嫌いなの。  
姿を見るのも声を聞くのも嫌。

その都に騙される馬鹿な人間もね」

## にじゆはち

蓮side

朝、いつも通り登校。

いつも通り幸人さんのHR。

ただ、違ったのは転入生が、来た。

「滝川 都>タキガワミヤコくです!!  
よろしくね」

周りのパンダ女とは違い顔はいいと思う。

「み、やこ・・・?」

その転入生に反応した茱希。

琉希も驚いているみたいだった。

「あー!! 茱希に琉希っ! 久しぶりい」

親しい友達のように話しかけた転入生に対し



「近付くな．．．」

明らかにトーンの低い琉希の声。  
何故？友達なら嬉しいんじゃないのか？

「．．．．．なんで」

茉希も同様、嬉しそうではない。

「ちょっと、幸人、ごめん．．．」

フラリと教室を出て行く茉希を  
不思議に思いながら見ていた。  
琉希も席を立てて茉希に着いていく。

幸人さんも何故か止めず複雑そうに見ている。

「初めまして！！私、都。よろしく！！」

ぼーっと見ていると転入生、舌都がきた。  
都は猫なで声をだしたり怖がったりせず

話しかけてきて他の奴らはすぐ打ち解けた。

陸を除いて。

「ねえ、茱希達どこ行ったんだろ．．．」

眉を下げて心配そうな面持で都が言った。

「それもそうだね。探しに行こうか」

いつの間にか陸もいなくなっていた。

茱希を探しに行ったんだろう。

「陸みっけ」

屋上に行くと陸がフェンスから下を見ていた。

「茱希、見つけた」

陸のいるフェンスから見ると、  
中庭に茱希と琉希。

「相変わらずラブラブやなあ」

よし！！引き離しに行くでっ！！！！」

あいつ等が双子なのは分かってる。

だけど茱希が琉希にしか頼らず、

俺等を頼ってくれないのにイライラする。

「あ、茱希くってどないしたん！？」

中庭つくと茱希は一人で、

屋上からは確認出来なかったけど

髪も、全部濡れている。

上に着ているブレザーは琉希の物。

「ちょっと水遊びをね．．．」

「この寒い日に！？」

明らかな嘘。

茱希だってそこまで馬鹿じゃない。

それに琉希が止めるだろう。

「茱希っ大丈夫??」

心配そうな声をだして都が近付いた。

「触んないでくれる？」

パシッ<sup>。</sup>と茱希が都の手を払った。

「なんでっ？私は心配して……」

「あんたに心配されたくない」

茱希がこんなにも無表情なのは見た事ない。

「茱希酷いよ。都ちゃんは心配してるのに」

海斗が茱希と都の間に入り都を守るように  
茱希の方へ向いた。

「私、都が嫌いな」

それを見て声も機械的になった茱希。

「茱希、言い過ぎだ」

どうしてそこまで都を嫌うのか知らないけど  
言い過ぎだと思った。

「近寄んな」

琉希が戻ってきたらしい。

「俺も、都が嫌いだ」

まるでそれが当たり前だと言うように  
琉希も言った。

「本人に向かって嫌いなんて最低やで」

それを聞いて泣きだした都を見て  
敦も茉希達に言い返した。

「あははっやっぱり、同じね」

「・・・・・・・・そうだな」

自嘲気味に笑う茉希とそれに乗る琉希。

「何が？」

何が”同じ”なのか、誰と”同じ”なのか  
気になって聞いてみた。

「さあ？自分で考えれば？」

向けられたのは茱希の冷めた言葉。

「んじゃ、都と仲良くねー♪」

「馬鹿みてえ……」

中庭を去って行く二人をただ啞然と見ていた。

――

――

――  
ガラッ

「……………」

次の日教室に入って来た茱希達に挨拶する者は誰一人としない。

「ねえ、そこ邪魔」

茱希の席に座っている都と話している俺たちも同様。

都に向けられた

茱希の冷めた声、表情、眼。

「えーだってこの席蓮くん達と話しやすいんだもん。  
茱希、席変わってよ」



菜希は俺たちと眼を合わそうとせず、ただ、都と話している。

「いいよ。てか荷物とりに来ただけ。学校には来るけどこの教室には来ないし。勿論、琉希もね」

この言葉で俺たちの空気が変わった。

「なんで！？菜希？？琉希？？」

多分、ここにいる奴らは菜希が好きだ。女嫌いの陸までも。……俺も。だから正直会えないのはキツイ。

「言ったでしょ？私達、都が嫌いなの。姿を見るのも声を聞くのも嫌。」

「その都に騙される馬鹿な人間もね」

にじゅうきゅう

あーあ、ほんとバツカみたい。  
結局、同じじゃない？

「あの眼・・・都を信じきってるな」

理事長室でゴロゴロしながら  
琉希と刹那と話していた。  
まっちゃんは職員会議かなんかで不在。

「あはっ見た？私を見る眼。  
軽蔑してるよ。」

あ、刹那はあいつらといてもいいんだよ？」

刹那があいつ等という事で私達は刹那と  
離れようとは思わないしね。

「いえ、私は貴女方と共に」

だけど芽依や都の事は刹那に関係ない。  
わざわざ刹那まで離れる必要はないのに。

「ん。なあー昼飯・・・」

そういえばもうそんな時間かぁー！・・・

「んじゃ買いに行こー」

3人で理事長室をでて購買へ行った。

そこは相変わらず混んでいて、  
パンダ女の集団がいるから蓮達がいるらしい。  
その集団に目もくれず並んでいるご飯をみた。

「チョココルネといちごミルクくださーい」

おばさんに注文して袋を受け取った。  
琉希と刹那はもう買い終わったようで、  
・・・うん、パンダ女に囲まれている。

「琉希ー刹那ー置いてっちゃんよー！！」

その集団に向かって声を掛けると  
パンダにめっちゃ睨まれた。

「つまってよ茱希!!」

「茱希様っ」

軽くビビってる琉希に  
オロオロしてる刹那。  
もうめっちゃめっちゃ笑っちゃうし。

「あはははッ!! やば、お腹痛いしッ」

襟首掴まれて振り返ると蓮がいた。  
一気に冷める。

「はぁー何?」

なんかもう超睨まれちゃってる。

「お前なんで笑ってんの?」

はい？人の勝手でしょ。

「昔、お前の彼氏が都の事好きになって  
それで都を恨んでんだってな？  
逆恨みじゃねえか？それって」

こいつ、何いってんの？  
私に彼氏なんかいた事ないし。  
彼氏がいたのは都でしょ？

「――最低だな」

嘘を吹き込まれて都を信じるんだ？

「私、最低なんだ？

じゃあその傷心の都でもあんならで  
慰めてあげれば？」

都の話、内容はあってるけど人が違う。  
都の彼氏が芽依を好きになったんでしょ？  
そして都がどっかの男に芽依を犯させて、  
芽依が自殺……

「本当、なんだな」

聞くまでも無いくせに。

もう、私を軽蔑の眼で見てるじゃん？  
後ろにいる、敦達も。

「さあね」

芽依は琉希が好きだったのに。  
琉希も芽依が好きだったのに。  
私の大切な人を二人も傷つけて、  
許すわけじゃないじゃない。

「サヨナラ。皆大っ嫌い」

腕を掴んでる蓮の手を振り払って、  
琉希と刹那の所へいった。

「茉希、様？あの話・・・」

そうだった。刹那は知らないんだ。  
芽依を。都を。

「理事長室で話してあげる」

ボタン

理事長室に戻り口を開いた。

「昔ね、芽依って子がいたの。」

芽依は私達の親友で、都も親友だった。

私達4人はいつも一緒にいてね、

その中で唯一、都に彼氏がいた。

ある日、その彼氏も一緒に五人で

遊びに行った。そこで、その彼氏が

芽依を好きになった……

彼氏は芽依が好きだから別れを切りだした。

でも都はそれに怒って3、4人の男に芽依を

襲わせた。芽依はショックで自殺……

私達は都を責めた。でも、都は……

笑ってこう言ったの。

『彼氏を取る芽依が悪い』って。

芽依は琉希が好きだったのに……」

芽依も琉希も好き合ってる事分かった。

でも私が一人になるから付き合わなかった。

気にしないって言ったのに……



ガチャ

「……やっぱり」

理事長室に入ってきたのは陸だった。

「「え……？」」

「あの女、怪しいと思った」

都に付かなかった陸。

ただ、女嫌いだからだと思ってた。

「なんで蓮にそう言わなかった？」

あれじゃあ肯定してる様なものだ」

どうして私が否定しなきゃいけないの？

「都の話信じて私達を軽蔑する絆なんて  
いないもの。あの眼、信じきってるし」

流石、女嫌いの陸には女の嘘はわかるらしい。

「……俺は今のあいつ等と行動する  
つもりはない。茱希という」

真剣に話してくる陸に笑いかけて

「いーよ。でもさっきの話は内緒だよ」

「わかった」

さんじゅ

「――茉莉希．．．」

あの日から徹底的に蓮達を避けた。  
勿論、陸以外。

「ナニ」

今日は一人で中庭で寝転がってた。  
そこで、蓮に会った．．．

「都と親友だったんだろ？」

お前が謝れば済むんじゃないやねえの．．？」

都と仲良く話す蓮を見て、痛む胸に  
気付かぬフリをしながら．．

「．．．．．」

黙りを決めこむ私を抱きしめて、

「茉莉、俺はお前が好きだ」

「……は？なに言ってるの？  
いきなりすぎ、でしょ……？」

「だけど傷付いてる都をほっというて  
茉莉という事は出来ない。  
だから「都と仲直りしろって？」

動揺した心が冷めていく……

「無理。もう都の事友達として見れない」

芽依を殺した。その事実を笑って認める  
アイツと仲良く？無理。

「……陸はどうしてる」

あの日から陸は倉庫に行っていない。

「元氣だよ。相変わらず女嫌いだけど」

購買に行ったりするとパンダに囲まれて  
眼、うるうるしちゃって可愛いんだよー

「蓮！！一つ教えてあげるっ」

蓮の腕から逃れて立ち上がった。  
ムカつくから意地悪。

「私、蓮の事好きだよ！！  
でも都という貴方とは居れない」

勿論、恋愛対象としてね・・・

んじゃね！！と言って中庭を去った。

――――

――――

――

蓮side

「蓮! 一つ教えてあげるっ」

そう言って俺の腕から抜け出した  
菜希は悪戯を思いついた子供の様な  
顔をしていた。

「私、蓮の事好きだよ!!」

でも都という貴方とは居れない」

中庭を走り去っていく姿を  
ただ、茫然と見ていた・・・

「しゅ、き・・・?」

言葉とは裏腹に、彼女が涙を流した訳を  
考えながら――

蓮sideEND

さーていーわん

・ ・ ・  
l p p p

突然、鳴り響いた携帯。  
それを戸惑いなくとった。

「はーい。陸〜？」

これが最悪の知らせとも知らずー

「ッ！！！？今いく！！！」

【蓮がバイクで事故って病院に．．．！】

【手術は成功したけど意識不明でッ．．．】

中庭で会話して数時間後の事だった．．．．

陸の「意識不明」この言葉だけが、

頭の中を占領してバイクを走らせた。

「っ茱希!？」

病院に着くと入口の側に陸がいた。  
驚いてるのは私がバイクに乗ってきたから。

「蓮は!？どうしたの!!」

「蓮はさっき眼覚まして後遺症もない  
みたいで安心した・・・」

その言葉に体の力が一気に抜けた。

「病室、行こう」

陸と蓮の病室まで行った。  
足を踏み入れるとそこには都達もいた。  
紫月さんも。

「蓮、だいじょ「お前誰?」・・・え?」



血の気が、引いた。

「は？蓮、冗談止めろよ．．．」

紫月さんが蓮の腕を掴んだ。

「冗談じゃねえよ。こいつ誰？」

私の事だけ、忘れちゃったの．．．？

「茱希だぞ？分かんねえのか！！？」

今日、中庭で私を好きって言ったじゃん．．．  
忘れたの？

「あ．．．ごめ、なさ．．．」

もうどうしようもなく悲しくて、  
涙が溢れてきて、咄嗟に病室を出た。

「茱希!!!!!!」

後ろから呼び止める皆の声を無視して。

ドンッ

「ツキヤ・・・すみませ・・・琉希っ」

琉希を見たら止まった涙が出てきて、  
思わず抱きついてぽろぽろ泣いてしまった。

「茱希・・・? どうした?」

優しく撫でてくれる手に安心して、  
涙腺崩壊。

「れ・・・んが、私だけ、忘れちゃ・・・った」

そのまま泣き続けて疲れたのか、  
私は抱きついたまま寝てしまった・・・

――――

――――

――

「ツチ・・・アイツざけんなよ・・・」

泣き疲れて眠った菜希を  
横抱きにして蓮の病室に向かった。

バンッ

扉を荒々しく足で開けると看護婦に注意  
されたけどそんな無視。

「蓮てめえ死にてえのか」

都と笑って話す蓮に苛ついた。  
菜希を忘れて、菜希を泣かせて。  
俺がキレるには十分過ぎた。

「その女、琉希の知り合いか？」

なんで俺を覚えていて茱希を忘れる？  
忘れるなら俺でよかったのに・・・

「てめえ茱希が好きなんじゃねえのかよ！！  
それがなんだ！？都に騙されて茱希を傷付けて  
拳句の果てには忘れただと！？  
ふざけてんじゃねえよ！！！！」

相当殺気がでていたみたいだけど  
そんなのきにしてらんねえ。

「都ちゃんに騙されてるってなんや？  
茱希が都ちゃんに逆恨みしてんやろ！！」

逆恨み？ふざけんのも大概にしろよ・・・

「てめえらも最低だの酷いだの  
俺等の何を知って言ってんだよ！！  
こっちの話も聞こうとしてねえくせに  
甘えた事いつてんじゃねえ！！！！」

「そうだよなあー」

「俺等も茱希を泣かされて黙ってる程  
甘くねえんだよなあ」

突然入ってきた声に驚いてそっちをみると  
幸人とまっちゃん

「幸人さんと・・・理事長!？」

真哉の驚いた声と同じで、  
全員この二人の登場に驚いてる様子。

つーかどこの情報だよ・・・

「琉希様、すみません・・・」

刹那か。ひょこつと後ろからでてきた。

「あーあ茱希の眼腫れてんじゃん。  
連れて帰るから頂戴」

サラッと言ったまっちゃんに乘せられそう  
だったけど、

「あ”？殺されてえの？まっちゃん」

殺気をだして言うと言顔蒼白。

首が折れるんじゃないかってくらい  
左右に振って否定した。

「騎士様強すぎ。あ、王様か。」

姫を守るのには手段を選ばねえなあ」

幸人、殺してやろうか。

俺等の通り名、水王と水姫。

姫を守る王。

「菜希を傷つける奴は誰だろうと

許さねえ。例え、女でもだ」

都や蓮、真哉達を睨んでから  
病室を後にした。

さーてーっー

蓮side

「茉莉を傷つける奴は誰だろうと  
許さねえ。例え、女でもだ」

そう言った琉希はありえない程の殺気。  
後ろにいる幸人さんや理事長、刹那も。

あの殺気に琉希達が出ていった後も  
暫くフリーズした。

「・・・ッあの殺気、なんや・・・？」

全国NO.1の幹部や総長が苦しくなる程の物。

「やっぱり、あの双子は不思議ですね・・・  
理事長たちとの関係も・・・」

“双子”・・・？

「双子って誰が・・・？」

すると、都以外の奴らが哀しそうな顔をして俯いた。

「ほんとに、茱希を、忘れちゃったの・・・？」

諒が俯いたまま声をだした。

こいつ等がこんな顔をする程に俺等にとって大切な女だったのか？女嫌いなはずの陸までも・・・

「わりい、忘れた・・・」

だけどあの女の涙を見た時胸が痛んだ。無性に、抱きしめたくなった。

「あの子は琉希と双子で茱希って言うんだ。

真っ直ぐで、こんな俺等にも笑ってくれて、

俺等にとって大切な人で、

記憶のあった蓮が好きだった子だよ」



最近は笑ってくれないけどね、と  
諒は悲しげに付け足した。

俺の、好きだった女・・・？  
都じゃないのは分かる。

こいつが笑っても心が満たされない。

「もう俺等には笑ってくれへんかもなあ・・・」

と敦が呟いた。

「何言ってるの！私がいるじゃない！！」

ニツと都が笑って自信満々に答えた。

「お前なんかと菜希を一緒にするな」

陸が都を睨んで椅子からたった。

「陸、どこいくん？」

病室を出ていこうとした陸を引き止めた。

「茉莉の所に決まってるだろう」

一瞬、俺を見て去っていった。

蓮 side END

さんじゅさん

「……っん……」

目が覚めると何故か周りは真っ暗で、何も見えなくて、暖かった。だけどよく知っている香りがして、琉希に抱きしめられてるって分かった。

「……琉希……」

とても安心する香りに顔を埋めて目を閉じた。

体を包む腕に少し力が入ったのを感じて。

「茉希……起きた？」

上から息が髪にかかってくすぐりたい。

「うん。でも、まだこのままで……」

フツと笑って髪を優しく撫でてくれる  
暖かい手が気持ち良くて、また寝ちゃいそう。

「今日は学校サボるか」

……蓮のどこにいつてからだいぶ寝てたんだ……

「ん……。お出掛け、したいな……」

琉希とは一緒にいるけど何処かで遊ぶって  
事はあんましたことない。

……一応、お嬢様だし？

「こうしてたいんじゃないかった？」

「もう少ししたら準備するもん……」

顔は見えないけど意地悪そうに笑うのが  
想像できて拗ねた様に言った。

「いいよ」

わざと、話を反らしてくれてるよね？

琉希は気付いてたんでしょ？

私が気付くずっと前から、

蓮に対する私の気持ちに――――

「ありがと。――大好き」

無性に言いたくなった。

琉希が大好きだって。信頼してるって。

・・・離れないでって。

「俺も」

多分、琉希の顔は赤いでしょ？

だってそうそう言わないもんね。

まあ、言わなくても分かってるけど。

「さあって!!準備しよッ」

いきなり私が起き上がったから、

琉希がベッドから落ちた。

「つてえ・・・」

うん。だろうね。ガンッて音したもん。

あ、ここ琉希の部屋じゃん。

「じゃ、着替えてくるから琉希もね!!」

さんじゅうよん

「んで？どこ行きたい？？」

んー・・・ 実は大して行きたい所ないんだよね。  
ふつーに家でまったりでいいんだよ。

「琉希の行きたいところ」

多分・・・てか絶対分かってるし。  
私に行きたい所が無いこと。

「・・・まあ、いいや・・・」

琉希のバイクの後ろに跨って、  
腰に手をまわした。

「ちゃんと捕まってるよ？」

そう言って私を撫でると前を向いて  
バイクをふかしはじめた。

多分、私の頭撫でるのは琉希の癖。  
それが好きなんだけどね？

なんか落ち着くんだよね、琉希の手。  
あ、禁断の恋にはしってないからね？

「りょーかい」

背中に顔を埋めて眼を暫く瞑っていると、  
バイクが止まった。

「茉希、顔上げて」

言われた通りに顔をあげるとそこは、

「芽、依・・・？」

芽依が眠る、真っ白な花で埋め尽くされている  
綺麗な丘ーーーーー

「そ。最近来てなかっただろ？」



この白い花は芽依みたいで、  
この花を見てると切なくなる。  
涙がこみあげてきて琉希に抱きついた。

「・・・ツ・・・ごめ、なさい・・・」

守れなくて、ごめんね  
苦しんでた事に気付かなくてごめんね  
琉希と一緒にいさせてあげられなくて、  
ごめんなさい、芽依ー

「・・・・・・・・あ」

ふと小さな声が聞こえて顔を上げようと  
するも、琉希に阻止された。

「都ちゃん！！待ってやあ」

・・・・都？敦？

「あのバイク誰のなんだろう？？」

「はぁ．．．陸、ちゃんと歩いて」

「ツチ．．．」

海斗？真哉？陸？

じゃあやっぱり蓮もいるんだね．．．

「茉莉、琉希．．．」

グツと私を抑える力が強くなって、  
いくら喧嘩で私の方が強くても、  
こういう力では勝てない。

「「「え!？」」「」」

また会っちゃった。

もう会うつもり無かったんだけど．．．

「ココにそいつらと来たって事は  
話したのか？」

琉希の声が上から聞こえて、  
頭を上げようと試みるけど無駄。

「・・・ううん」

「ふーん・・・じゃ、俺らは帰るから」

ふわりと体が浮いた。

「・・・え!?!? っちょ・・・下ろして・・・!!」

お姫様抱っこされてるって気付くのに  
多少時間がかかった。

「はいはい、帰るから大人しくして」

何なのよ・・・恥ずいて・・・

「え? 帰るってもしかしてあのバイク・・・」

「俺のだけど」

もう諦めてまた胸に顔を埋めた。

「．．．乗れたの？　そういえば茱希も．．．」

しまった．．．病院に行く時バイクで．．．

「ウルサイ。関係ない」

琉希、これじゃあ初めて会った時と同じだよ。

「．．．そっか。関係ない、ね．．．」

みんなの悲しそうな顔に、  
胸がズキリと痛んだけど無表情を貫く。

都が、本当の気持ちを言ってくれるまで。

「．．．待ってッ」

立ち去ろうとした私達を都が引き止めた。

「なに？」

「あの、ごめんなさい．．．」

違う、そうじゃないの。

私達が聞きたいのは謝罪の言葉じゃない。

「都、知ってるの。でも都から聞きたい」

そう言うと琉希が下ろしてくれて、  
都の顔を見るととても驚いた顔をしていた。

「．．．わかった」

## さんじゅい

都 s i d a

「あれは．．．全て恍の指示なの．．．」

恍は私と付き合ってた。

茱希と琉希、芽依と私と恍で遊んだ日  
全て壊れた．．．

茱希も私も芽依が琉希を、琉希は芽依を  
好きだった事は知ってた。

お互いの想いもわかってた。

でも茱希が一人になるからってあの二人は  
幼馴染のままである事を望んだ。

でも茱希はそれが嫌だって言ってた。

琉希も芽依も大切だから幸せになって  
ほしいって．．．

だから私達はあの日に二人を付き合わせようと  
計画をたてた。

だけど恍が．．．芽依を好きになってしまった。  
ショックじゃなかった。好きじゃないから。

芽依はもちろん告白を断った。

でもその日の帰り．．．起こったんだ。

茱希との計画の実行も帰り行う予定だった。

．．．．．その計画が引き起こしてしまうのに。

まず菜希が琉希を連れてって、  
私は慌を別の場所に連れていった。  
必然的に芽依は一人になる。

そこに菜希が琉希を行かせる．．．はずだった。

私が慌から目を離れた隙に慌が消えた。

探しても見つからなくて、

芽依のそこへ戻ると．．．芽依はいない。

嫌な予感がした。

慌は不良とよくつるんでた．．．

周辺を探し回ると人の声が聞こえた。

「いやっ．．．やめてえ．．．！！」

芽依の声だった．．．，

必死に足を動かしてその場にいくと

数人に犯されてる芽依とそれをみてる慌．．．

「な．．．にやってんの！！？」

「み．．．やこ．．．」

掠れた声で話す芽依は痛々しくて．．．

「俺に逆らうからだ」

笑ってる慌に怒りを感じて、

その男達を帰らせると私に言ったんだ．．．

「誰かに言ってみろ。その時は．．．．．  
菜希の番だ」

私のせいで．．．芽依が傷付いて．．．．  
菜希まで傷付くの？それは駄目だと思った。

「み．．．．や．．．こ．．．琉希に．．．嫌われちゃ．．．う」

「芽依っ．．．．」

琉希は嫌われないと思ってた。  
でも芽依の傷は消えない．．．．  
だから私が犠牲になろうと思った。  
その日、芽依を家まで送って帰った。

次の日それを後悔する．．．

「め、い．．．．ツ．．．」

「嘘、だよな．．．．」

どうして？どうして私達はここにいるの？  
菜希も琉希もどうして泣いてるのー．．．？

メイガシンダ．．．

飛び降り自殺．．

即死だって．．．





なめないでよ、水心を。

あの頃にはもう活動してたから。

「慌からの連絡はもうこないよ。

会うこともないと思うよ」

私達が潰したから。

芽依を犯した奴らも一緒にね……

「まああれだけ脅せば十分だろ」

「かなりビビってたよね」

笑いながら話す私達を不思議そうに見る  
都と蓮達。

「え……どうゆう事………?」

混乱してるみたいだね。

あいつがそう簡単に手を引くわけないでしょ?  
だからね、

「「私達（俺達）が潰した」」

薬やってたからサツに回した。  
今はムシヨにいるんじゃない？

「え．．．でも恍達は喧嘩強いのに．．．」

あんなの雑魚。

「あんな人数いても雑魚だ」

「まあとりあえず．．．ありがとうございます都」

あの日私は襲われても返り討ちにしたと思う。

「ううん．．．っ．．．私こそごめんなさい！！」

「これからまたよろしくね（な）」

なにその顔．．．都驚きすぎ。

「また．．．一緒にいてもいいの？」

え、駄目？

「もちろん!!」

「今度こそずっと一緒だよ・・・」

ずっと一緒・・・それは守れないよ。きっと。

私達は離れなきゃいけない日がある。

世界が違うんだ・・・

表の都と裏の私達・・・ 神田はヤクザでもあるから。

さんじゅうろく

「「「「「」」」」」」

さてこの雰囲気はナニ？

「いいたい事あるなら言えば？」

さっきからモジモジウザい。  
え？ キャラキツくなったって？  
気のせいだよ☆

「その・・・二人とも・・・」

「なんだよ」

ほーら琉希もイライラしてるよ

「「「「めんなさい」」」」」

「「は？」」

いきなりなんなわけ？

「都ちゃんとの事全然知らないのにつ．．．  
俺等二人を責めて．．．」

ああその事？別に．．

「「どうでもいい」」

「「へ．．．．？」」 海斗&敦

「「え？」」 真哉&陸

「は．．．？」 蓮

え、なに？ 私達が傷付いたとでも？？  
んなわけないでしょ。

「なんでや．．．？」

「だって他人の価値観なんて関係無いでしょ」

わかりあえる人がいればいい。

琉希や刹那、ママやパパ。

そういう人がわかっててくれればいい。

「どうして他人なんていうの・・・？」

可愛いーねえ海斗は。

「だってそうでしょ？」

甘いんだよ、考えが。

「ま、都から話も聞けたし帰ろっか。

琉希」

「ああ」

何故か固まってる海斗達を通り過ぎて  
帰ろうとした。

パシッ

「ッ．．．．．蓮？」

どうして止めるの？ 離してよ。

触れないで。

私の記憶がない蓮に私の気持ちは虚しいだけ。  
だから、お願いだからやめてよっ．．．

「俺の仲間を傷付けるな」

「おい、蓮！！」

「ちょ．．．なにいつてるの！？」

ああ．．．駄目だ。

「っごめんね。もう．．．関わらないから」

どうしようもなく辛い。

「茱希っ！？ 嫌だよ！！」



「ごめんね海斗」

どうしようかな。引っ越す？  
蓮を見れば苦しくなる。

「茱希．．．冗談やめて．．．」

「ごめんね真哉」

もう無理だ。この想いも、全部。

「嘘だよな．．．茱希」

「信じてくれてありがとう陸」

人をまた好きになれるかな？  
蓮以上に好きになる人いるかな？

「嫌やッ！！そんな事言わんといてや．．．」

「痛いよ、敦」

思いっきり抱きついてくるのは痛いよ。

「残念だよ蓮。お前には期待してたのに」

ふふっ 琉希は何を期待してたの？

「茉莉を幸せにしてくれるって思ってたのに．．．  
お前にはガツカリだ」

琉希がいれば幸せだよ？  
もう他人との幸せはいらない。

「本当にさよならだね。  
みんな、バイバイ」

「ヤダ！！！！」

苦しいってば．．．  
高校性の男が二人も抱きついてきたら．．．  
真哉と陸も何気に腕つかんでるし。

「蓮！！俺等は茱希達に傷付けられたなんて  
思っ てないよ！！俺等が悪いんだよ．．．？」

海斗、どのみち私は姿を消すつもりだったよ？  
だからいいんだよ。  
きっぱりフラれた方が気持ちの整理がつく。

「琉希、いこう」

「茱希は．．．それでいいのか？」

「いいよ」

掴まれてた腕を解いて体を離した。

「さようなら」

そう言ってその場を去った。  
蓮以外が呼び止める声を見捨てて。

「さて、まっちゃんに連絡しよう」

ピリリリ・・・

《もっしー☆茱希が電話なんて珍しいな》

「うん、お願いがあるの」

《・・・なんだ？》

さすが。雰囲気伝わったらしい。

「学校。辞めたいの」

《っはぁ！！！？なんだよ急に！！》

「別に。駄目？」

《駄目だ！！》

「はぁ・・・じゃ、休学って形で」

退学でいいんだけど。

《わかったよ・・・琉希は？》

「いや、琉希は「俺も」・・・だそうです」

よく聞こえたね。バイク乗ってんのに。

《わあーっ たよ!! じゃあな》

「ん。ありがとう」

電話を切ってもうすぐ日が沈む、  
オレンジ色の空をみた。

「ー．．．綺麗」

自然と呟いた。

「無理すんなよ．．． 菜希」

「わかってるよ」

さんじゅうなな

真哉 s i d a

「蓮．．．ハア．．．蓮っ！！」

「っなんだ．．．」

ねえ 茱希、琉希戻っておいでよ．．．  
蓮が．．． 茱希の事思い出したんだよ？  
自分のした事を責めてるんだ。

「明日の亜蛇との喧嘩だけど．．．大丈夫？」

蓮が荒れてるよ、守れなかったって。

「ああ．．．」

蓮だけじゃないよ。

敦の女遊びは激しくなったし  
海斗はいつもボーッとしてる。

楷はほとんど喋らなくなったよ？

俺だってダメージはあるけど．．．．．

幹部が全員そんなんじゃないでしょ？

「あの二人の事は．．．一旦頭から抜かないと、  
蓮が殺られるよ」

亜蛇は鉄パイプやら金属バットやら持ってる。  
そんなの相手にボーツとしてたら．．．

「そう、だな」

お願いだから、戻ってきてよ．．．

！！！！！！！！！．．．．．

「琉希ー！！行こっ」

「あー．．．眠い．．．」

あの日から毎晩族潰しやってまーす。

あ、やみくもにじゃないよ？  
悪い事してる族やたまにヤクザ（笑）

「今日のターゲットはN O. 4の所。弱いけど」

N O. 4ねえ、どれくらい楽しめるかな？

「りょーかい！！」

今の族は雑魚ばかりだからなあ・・・  
てかヘタレ？

キキイッ

・・・あれ？着いたのはいいけど・・・  
倉庫の中静かすぎない？  
でも・・・バイクが大量・・・

「ねえ琉希・・・他の族がいるみたいだけど・・・  
ってええ！！？」

なにやってんですかー！！  
なんで超堂々と扉開けちゃってんの！？



まあ・・・いつか。

「気付いてない」

気付いてない・・・うん、そうだね。  
てか他の族って・・・蓮達じゃん・・・

「琉希、知って・・・!!?っ蓮!!」

蓮の後ろからナイフを持った男が走ってて  
亜蛇の総長とやりあってて気付いてない・・・  
・・・咄嗟に、走りだしてた

「セコい手使ってんねっ!!」

その男の手を蹴ってナイフを奪った。

「水姫・・・!!!!!!」

「え、知ってんの?嬉しくなくい」

ナイフは琉希の方に飛ばして男を殴って  
気絶させちゃった☆

・・・キモイね、ごめん。

「危ねーもん飛ばすなよ・・・」

ちやつかりキャッチしてるじゃん。

「ごめーん」

「「「「水心・・・」」」」

ありゃ、目立ってる？

「ごめんね？族同士の争いに手出すつもり  
ないから。気にしず戦ってて」

「水姫、もう終わってる」

え、マジですか。

んん？ほんとだ、総長のびてるよ・・・

「そっか。じゃ、帰ろー♪」

「・・・茉希」

「・・・え？」

今、私・・・髪にスプレーしてないよね？  
カラコンつけてないよね？

じゃあどうして蓮は私を呼んだの？

「な・・・蓮、なに言ってるんや？

水心が茉希達なわけないやろ・・・？」

「っそうだよ。蓮、どうしたの？」

どうしてそんなに真っ直ぐな眼で私を  
見るのー！・・・？

「お前は茉希だ」

「っ・・・！！！」

そんな風に優しく抱きしめられると、  
どうしていいか分からなくなるよ．．

「やめろ。水姫を離せ」

る、き．．．．

「嫌」

「つてめえ殺すぞ．．！！」

自分がハメたのに．．

「泣かしてんじゃねえよ！！」

え？私、泣いてるの？  
頬に触れると涙が伝ってた．．

「ま、待ってや！！水心．．．お前らは、  
琉希と茱希なんか．．？」

「うっせえ黙ってろ馬鹿敦」

あ．．．．． やっちゃったよ、琉希．．．

「る、琉希やあ！！」

敦って思いっきり呼んじゃったよ．．．

「ほんと．．．？ほんとに二人なの？」

可愛いよー海斗くん。

その首の傾げる角度 V e r y C u t e ！！

「しゅ、き．．．．」

「あ．．．．． 喋った」

え、今なんて言った？

陸が言った後真哉喋ったって言わなかった？

「ちょ、喋ったってどうい．．．っ．．．蓮？」

「離れんな．．．馬鹿」

真哉に近付こうとしたら腕を引っ張られて  
もとの態勢に．．．

「．．．ねえどうして私達が分かったの？」

今まで分かる人なんていなかった。  
ママ達さえも誰？って言ったし．．．  
．．．あ、刹那はわかったや．．．

「髪色や眼の色は変えても  
声は変わってない」

声？そんな特徴的な声じゃないけど．．．

「つーか蓮の場合は茉希の声だけだろ。  
俺の声じゃ絶対気付かないだろ」

「．．．当たり前」

「死ね」

なんか蓮と琉希の2ショットってなかなかないよねえ・・・そうだ。

ピロリン♪

「わー綺麗に撮れてる」

最近の携帯は発達してるね！！

「消せ」

「・・・」

わお、蓮は命令口調。

琉希は表情で訴えてくる・・・

「やーだよ♪」

「何が哀しくて男と2ショット撮るんだよ」

琉希くん、私が嬉しいからいいんだよ。

「保存完了よっ……んっ……!?」

「ざまあみろ」

ニヤッと笑って言い放ったこのキス魔。

「ば、ばば馬鹿蓮ー!!!!!!」

「まあまあ二人共、着いてきてね?」

あのー……真哉さん? いや、真哉様?  
着いてこいよ? にしか聞こえません……  
チラッと隣をみると流石双子って感じ。

同じ事を思ったのか顔が引き攣ってる琉希。

「「はい……」」



## 三十八

「で、どういう事かな？」

真哉くんこわい！！

「菜希、頭の中でふざけないでくれるかな」

うわ、何故わかった！？  
まじで恐いわ・・・

「うん。わかったからさ、

・・・コレどうにかしてよ」

ここは幹部室で総長イスに座ってる蓮の  
足の間に座らされて後ろから抱き締められてる。

おかげで落ち着かないのなんのって・・・  
一応好きな人だし。

「蓮、離してあげなよ」

「……………」

無視って!! 無視って何!?!?  
こっちは心臓壊れそうだって!!

「離して……」

「離れたいわけ？」

うつ…………… そんなんじゃないけど。

「…… 茉莉、もう諦めて。

ねえ、二人が水心…… なんだよね？」

あう…… ほんとドキドキし過ぎて死ぬ…… っ  
て  
今はそんな事じゃなくて!!

「うん」

「ああ」

「・・・そっか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

え、この沈黙なに？

「ねえねえ！！茱希達の髪って地毛？？」

髪？え、髪？！

「・・・まあ、うん。てかね、そんだけ？」

「なにが？」

「や、真哉氏による質問という名の尋問」

「え？よく聞こえなかったんだけど・・・」

笑顔が怖い！！眩し過ぎて怖い！！

「じょ、冗談ですっ」

「そっか」

一生分の冷や汗かいたよ。  
てか琉希!! なぜ助けてくれなかった!?

「…………寝てるし」

おやすみタイムでした。  
まあ私が寝れないから一緒に寝てもらってたし  
しかたないか。

あ、電話しなきゃね。

「もしもし刹那?」

《はい》

え、電話の受け答えで”はい”っておかしいよ?

「あのね、蓮達の倉庫まで迎えにこられる?」

《かしこまりました》

ん、よし。ここで寝てたら駄目だしね。

「・・・なに帰ろうとしてんだよ」

でもね、暑いんだよ。

高校生の男子3人に引っ付かれてみてよ。  
死ぬよ？私今その状態だからね？

後ろに蓮、両隣に陸と海斗。

千津は・・・部屋の隅っこで体操座りしてる。

「琉希寝ちゃったし」

隣のソファで気持ち良さそうに寝てる。

可愛い・・・

コンコン

「入れ」

「失礼します。燕尾服の男がきてます」

燕尾服って事は……

「刹那!!」

ん？海斗？？仲良さそうだったもんね。  
まあ話があってそうなのは真哉だけど。

「通せ」

「はいっ」

……新羅に入るのには顔も基準になってるの？  
今の子も結構イケメンだったし。

ガチャ

「お久しぶりですね、蓮」

「チツ……」

え、なぜに舌打ち？？

「刹那、琉希を車に運んで」

さすがに私じゃ運べない。

「かしこまりました」

そう言うと軽々と琉希を持ち上げた。

「蓮、帰るから離して」

「嫌だ」

・・・  
どうしようもないなあ

「蓮達も家に来る？」

「ああ」

蓮達が来るなら今住んでるところじゃない方がいいよね。

「刹那、本家に行って」

「はい」

車に乗ってそう指示し、．．．．．寝た。

|||||||．．．．．

蓮side

スウスウ．．．

寝てる琉希に引っ付いて寝た茉希。

．．．なんで琉希なんだよ。

「蓮殺気でちゃってるよお」

「．．．うるせえ」

確かにお互いの想いは伝えた。

でも今はわからない変わってるかもしれない。

「ん．．．．．」



菜希が俺より琉希って事はわかってる。  
でもそれでも俺だけを見てほしい・・・  
今は戻ってきた事に感謝だけだな。

「着きました」

車から降りると目の前にはでかい家。  
・・・さすが世界No.1。

「お二人を部屋に運ぶので、  
どなたか手伝ってください」

琉希を持ち上げた刹那につられて  
菜希を横抱きしてた。

「蓮以外の方はその者が案内しますので」

蓮は私に着いてきてくださいと言って  
中に入った。

「はいです」

一つの大きな扉の中に入った。

「茱希の部屋？」

「茱希様と琉希様の部屋です」

．．．．．二人の部屋ってことか。

「なんで一緒なんだよ」

部屋なんてあり余ってるくせに。

「お二人の要望ですから」

琉希をキングサイズのベッドに寝かせ、  
笑いながらいった。

つかベッドもかよ．．．

しかたなく茱希を琉希の隣に寝かせた。

「．．．．．蓮。今度この二人を悲しませたら．．．  
私“達”は容赦しませんよ」

達？他にもたくさんいるってことか？

「ふふ、この方達にはたくさん味方が  
いるってことですよ」

怪しい．．．．．笑顔が怪しすぎる．．．

「．．．．．わかってる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7782r/>

---

二つのカケラ

2011年7月9日12時26分発行